
こんぺい島（三十分間の体験ゲーム）

スライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんぺい島（三十分間の体験ゲーム）

【Nコード】

N2973B

【作者名】

スライム

【あらすじ】

卒業を間近に控えた小学六年生、岩島美由紀いわしまみゆきは、小学校の思い出をなかなか作れずに悩んでいた。そんなある日、いつも見ているサイトの掲示板から、美由紀の兄が、友達と面白いゲームを見つけたことを知る。そのゲームとは、ゲームの中で一ヶ月間生活するというゲームであった。巨人狩りとなった美由紀のゲーム内の生活が始まる。

プロローグ

ここはとあるサイトのとある掲示板。

「あのゲームどうだった？」

「ああ、あれか？ やつと買ったよ。怪しい通販だな」

「そう？ じゃあ名前教えて。私のグループに入ってるよ」

「了解。そっちの名前は？」

「確か一カ月後に合宿があったよね？」

「おい、人の話聞いているか？」

「向こうにパソコンがあったはずだから、くすねて、ゲームやろうよ」

「事務室にノートパソコンが何台かあるって先生が言ってたよな？
うちの担任の先生がそれでPCゲームやるって自慢してたから、よく覚えてる」

「ああ、でも友達とか誘ってやったほうが楽しいよね？」

「そんなこともあるつかと、コピーしてみたよ。どうにかうまくいった」

「何枚あるの？」

「ざっと二十枚ぐらいかな。結構苦労したぜ」

「すごい！ じゃあ当日よろしくね」

「わかったよ。で、話戻すけど、名前は？」

「ああ、私？ 向こうだと性格が一変してるんだよね」

「そうか。じゃあ俺も性格変えてやる。で、名前は？」

「んもう、しつこいなあ。ゼロだよ。ゼ・ロ」

「わかった、ゼロな。了解」

その掲示板に書かれた内容が、岩島^{いわしま} 美由紀^{みゆき}に行き届くとは、一カ月後にそのゲームをするつもり的美由紀の兄が知る余地もなかった。

卒業が近づいてきつつある十一月のある日の放課後、岩島 美由紀（小学六年生）はクラスメートと共に保健室前の廊下を箒で掃いていた。

ここ最近、美由紀はため息をつく回数が増えたような気がする。

「どうしたの？岩島さん。気分でも悪いの？」

美由紀と一緒に箒で廊下を掃いていた保健室の先生が話しかけてきた。

「いえ。別に具合とかは悪くないんですけど・・・」

「何か嫌なことでもあったの？」

「・・・たいしたことではないんですけど」

「先生に話してみなさい。先生でよければ話になるわ」

先生は胸を張るように言った。美由紀は少し先生に期待して、不安げな口を開いた。

「その・・・もうすぐ卒業だっていうのに、普通の日々が過ぎていくばかりで・・・それで本当に思い出なんか残るのかなあって」

美由紀が言い終えると、先生はクスクスと笑い始めた。

「大丈夫よ。自分が思っていないところで、思い出っというのほできていくものだから」

先生はいいことを言ったように思えるが、先生が出した答えは、美由紀が母に十月に質問した答えと重なっていたので、先生の助言は、結局美由紀にとって参考にもならなかった。

「・・・そうですね。ありがとうございます」

美由紀は静かに先生へ、ペコリと頭を下げると、別の廊下の方へ箒を掃きに歩いていった。

（でも・・・やっぱり普通じゃないことが起こらないと、頭の中に残らないよね？）

掃除が終わると、美由紀はとぼとぼとランドセルを背負いながら

学校の帰り道を歩き始めた。友達と一緒に帰ってもよかつたのだが、今の気分では友達と帰る気にもなれない。

しばらく歩いていると、前方から美由紀の名前を呼びながら駆け寄ってくる私服の女性がいた。美由紀にとって先輩に当たる、中崎なかざき智広ちひろだ。

「今帰り道なの？」

「ええ、そうですけど……。中崎さんは？」

智広は美由紀の兄の友人にも当たり、仲は良いそうだ。

「メガネの検査に行つてたの。何ヶ月かに一度いかなきゃいけないね」

智広はメガネをかけており、とても秀才そうな顔つきをしている。見た目どおり成績もトップらしい。さらに、性格は明るく、家事もこなし、男子の中ではファンクラブを作っているというウワサもあるようだ。

「正広は今日、学校に来てた？」

正広まひろとは智広の弟であり、美由紀のクラスメイトに当たる人物だ。小学四年生のときの、あるいじめがきっかけで、学校にあまり行かなくなってしまうている。

いわば登校拒否だ。ひきこもりと言つても良いかもしれない。

「いえ、今日は来ていませんでした。最近、智広さんのことで何か話そうかと思つてたんですけど……」

「まあ話題はともかく……。ちよつと話しかけてやつてくれる？そうすれば、あの子もちよつとは学校に行こうとするはずだから」

美由紀は「わかりました」と言つてうなずいた。そしてさっきの掃除時間のような憂鬱ゆううつな顔に戻つた。

「どうしたの？美由紀ちゃん。なんかいつもより顔に元気がないよ。美由紀はこの人なら何か違う答えを出してくれるかもしれないと思ひ、智広の顔を見上げた。

「ちよつと相談に乗つてくれますか？」

「ひよつとして思い出とか卒業のことかな？」

美由紀は、ウツと息を詰まらせた。智広は昔からカンが良く、人の心を見抜くことが得意中の得意なのである。

「どうやら凶星みたいね。うーんそうだなあ、思い出を作りたかったら、自分から思い出を作りにいかなきゃね。思い出作りを待っていないで、自分から作り出した方がいいと思うな」

やはり期待通りだった。智広さんは違う答えを出してくれた。確かにそうだ。学校が作ってくれる卒業アルバムだけを待っていても、何の意味もない。

「じゃあ私はこれで。明日、正広が来たらよろしくね」

智広はそう言った後、美由紀に手を振りながら帰っていった。そうだよね。時間はまだまだある。その時間で自分の思い出を作っていけばいいんだ。地道に思い出を作っていくと美由紀は決心した。

家に帰ると、美由紀の兄が先に帰っており、いつものようにパソコンをしていた。

「お母さんは？」

「買い物に出かけた」

美由紀の母は専業主婦である。ちなみに美由紀の父は工事現場の監督で、毎晩帰りが遅い。

美由紀は自分の部屋に入り、明日までの宿題を軽く終わらせると、小腹がすいてきたので、

おやつを食べるに、兄がパソコンをしているリビングへ戻った。そこには兄はおらず、パソコンのスイッチがつけっぱなしだったので、美由紀はポツキーをつまみながら、パソコンの前に座り、いつもの掲示板のサイトへとページを運んだ。

そこで美由紀は、兄が面白いゲームソフトを、怪しい通販で買ったことを知った。

普段は全くゲームをしない兄がゲームを買った事実。その事実はそのゲームが相当面白いことを物語っていた。

でも・・・ゼロって誰だろう・・・？

夕食を終えると、美由紀は兄にそのゲームソフトについて聞いてみた。

「ねえ、お兄ちゃん。掲示板に書いてあったゲームって面白いの？」
兄はまるで嘘がばれた子供のようにあわただしい様子になった。

「お・・・お前・・・あのカキコを見たのか？」

「だっていつも見てるもん。それで、そのゲームは面白いの？」

兄はうーんと考えた後「ああ」と曖昧あいまいに返事をした。

「どんなゲームなの？」

「企業秘密だ」

兄はそう言った後、そそくさと自分の部屋に入ってしまった。いや、逃げたと言っべきか。

「ああ！逃げたな。このクソ兄貴！」

美由紀は兄の後を追って、兄の部屋へ走っていった。

それから一ヶ月間。美由紀は兄をできる限り見張り、そのゲームについて質問攻めしていたが、そのゲームについての手がかりは一つもつかめなかった。しかし、そのゲームをするチャンスを見つけた。

兄が合宿に行くらしい。しかもそのゲームソフトを持っていくようだ。これはチャンスだ。

夜中に兄の荷物をあさって、そのゲームソフトとやらを盗み出してやる。それが美由紀のゲーム盗み取り計画だった。

そして日は流れ、合宿前日。兄は明日にそなえて美由紀よりも早く寝た。

美由紀は計画を成功させるため、苦いコーヒーを一気に飲み、夜に備えた。

午後十一時。美由紀は自分の部屋で眠っているフリをしていた。お母さんとお父さんが寝静まるまで待機しているのだ。そしてお父さんのいびきが聞こえた。これは二人とも寝静まった合図に近い。

美由紀はそつと自分の部屋を出て、隣の兄の部屋に忍び込んだ。兄はベッドでぐっすりと眠っている。荷物であるバッグは兄の机の下に置いてあり、大きなポストンバッグとリュックが置いてあった。おそらくリュックにゲームソフトが入っているのだろうと思ひ、美由紀はなるべく音を立てず、リュックの中身を探った。

予想は当たった。CDのパッケージが二十枚ほど入っている。

「美由紀！お前また何かやらかしたな！」

美由紀はビクつと体を震え上がらせ、心臓の鼓動が三倍速ぐらいに速くなった。頭の思考回路は停止しており、身動き一つできなかつた。美由紀はしばらくその状態でいたが、どうやらさっきの声は寝言だったようで、兄はその怒った調子の声の後、寝返りを打つこともなく、スースーと鼻息を立てながら眠っていた。きっと夢の中で美由紀と戦っているのだろう。それにしてもさっきの寝言で、寿命が半分ぐらい縮まった。

二十枚ほどあるCDの中で、一つだけ銀色のCDがあった。それ以外はきつとこれをコピーしたものだろうとわかった。（暗くてよく見えなかったが、銀色なのはわかった）

美由紀は残りの十九枚を元のリュックにしまい、銀色のCDだけを持って、そつと自分の部屋へ戻った。

美由紀の感情は計画が成功した達成感にあふれ、夜十一時前後からしばらく二時間ほどは眠れない状態でした。幸い明日は創立記念日だったので、助かったのだが。

次の朝、美由紀はお母さんと一緒に、兄の合宿の見送りに出かけ

た。

兄の学校に着くと、校門前に大型のバスが四台あり、朝礼を終えると、美由紀の兄がお母さんと自分に「じゃあ、行ってくるわ」と言っ
つて、バスの中へ乗り込もうとした。

バスの中に入る前に、美由紀はこそつと兄に耳打ちした。

「向こうに着いたら、CDの数、もう一回ちゃんと数えてね」

兄は「こいつ、何言ってるんだ？」とでも言いたそうな顔で、バスに乗り込んでいった。

美由紀はついでに智広も見送ろうとしたのだが、智広を探している途中で、バスは行ってしまった。

美由紀は家に帰った後、パソコンを起動させ、いつもの掲示板へ行った。どのようなゲームなのか書かれてあるかもしれないと思っ
たからだ。（ここ一ヶ月はゲームソフトを取る計画を練っていたため、掲示板には行かなかった）

しかし、掲示板には先月のような書き込みは、まるでなかったかのように、消えていた。全て削除されている。美由紀はどういうことだろうと頭を悩ませていると、お母さんが美由紀に話しかけてきた。

「美由紀、ちょっとお母さん、歯医者に行ってくるわね。遅くなるかもしれないから、お昼ご飯はキッチンに置いてある物でも食べておいて」

美由紀はパソコンの画面に目を向けながら、「うん、わかった」と返事した。

お母さんは美由紀の返事を聞いた後、そそくさと家を出て行った。きつと予約の時間ギリギリだったのだろう。無理もない。兄の中学の校長先生の話が無駄に長かったからだ。

しかし、美由紀にとってはお母さんが歯医者に行くことは、すごく嬉しかった。お母さんは少々ゲーム系が嫌いなため、やつあたりに近い感じで何かと美由紀と兄のゲーム時間を制限する。だが、歯

医者に行っている間は二時間近くあるため、何も気にせずにゲームを楽しめるわけだ。美由紀はパソコンの隣に置いてあったゲームソフトのCDを、パソコンのCD挿入口に入れた。パソコンからCDを起動させる音が聞こえる。

すると、美由紀の意識が急にめまいを起こした。周りが渦巻いて、体がどのような状態なのかわからない。

やがて、美由紀の意識は知らぬ間にどこかに飛んでいた。

第一話、巨人狩り(1)・・・登録

美由紀が目を開くと、そこは巨大な郵便局のような建物の中だった。

窓口が五つほどあり、美由紀は窓口の順番を待つ席に座っていた。美由紀の服装はそのまま、右手には小さな紙切れを持っていた。紙切れには、数字で120と書かれている。

美由紀が、一体何が起こったのかと混乱していると、アナウンスの音が聞こえた。

「120番のカードをお持ちのお客様、二番窓口へどうぞ」

「え?・・・あ、はい」

美由紀はキョロキョロと、とまどいながら二番窓口の方へ歩いていた。

「カードを」

美由紀は不安ながらも、紙切れを受付の人に渡した。(身長が低いので、背伸びをして、ようやく受付の人の所まで届いた)

受付の人は紙切れを美由紀から受け取ると、カタカタと隣にあるパソコンのキーボードを打ち始めた。巨大な建物の中は、雑談で少々うるさかったが、美由紀には聞こえなかった。ここがどこかわからず、不安になり、その不安が聞こえる音全てをかき消していたのだ。

「ここに来ることは初めてですか?」

「初めてっていうか・・・ここはどこなんですか?」

受付の人はうーんと考えた後、口を開いた。

「承知しました。では、案内所へ行ってください」

受付の人は、美由紀に小さな紙切れを渡した。その紙切れには、小さな地図が書かれてあった。

「その通りに行ってください。向こうの出口を出て、左にまっすぐ進めばありますので」

美由紀はゆつくりとうなずいた。

「では、お気をつけて」

うなずいたのはいいが、どうすればいいのかわからなかったのも、美由紀はさつき座っていた席に再び座った。とにかく、この世界のことはまだ詳しく知らないの、受付の人が言っていた通りにしたほうがいいだろう。

美由紀はそう決意し、地図に書いてある方向へ足を運ばせた。

地図が必要ないぐらい、案内所はすぐ近くにあつた。巨大な建物と隣り合わせになっていると言ってもいいぐらいだ。案内所は小さな事務所のような建物で、目立つように大きな看板で「案内所」と書いてあつた。美由紀はまた深呼吸をした後、緊張して振るえている足をひきずりながら、中に入つていった。

中に入ると、若い青年が窓の向こうを眺めており、美由紀に気づくと、待つてたぞ、とでも言わんばかりの笑顔を浮かべた。青年は赤髪でサツパリした髪型をしており、腰には鞘さやがあつて、剣士の雰囲気だけをたたよわせていた。身長は170センチぐらいか。美由紀は青年の顔を見るのに、見上げなければならなかつた。(実を言うと、学校でも背の順では前のほうなのだ)

「おう、来たか。まあ座れよ」

案内所の中は、机をはさんで向かい合つたソファ、教師が使いそうなステンレスの大きな机、その上にはいくつかの書類とボールペーンが転がっており、まさに事務所と呼べる空間だつた。

青年がすすめたソファに美由紀は座り、青年は美由紀と向かい側のソファに座つた。

「えーっと・・・何から話せばいいかな？」

青年はさりげなく美由紀に質問した。しかし、美由紀はうつむいてしまつた。ただでさえ緊張しているのに、この青年の質問が余計に緊張させる。

「じゃあ、まずここはどこか？からかな。簡単に言えば、ここはゲ

ームの中だ。このゲームはパソコンのオンラインゲームみたいに、みんなでするゲームなのさ。つまり」

青年は一息置いてから続けた。

「俺達はゲームのプレイヤーなのさ」

美由紀の様子はまだ変わっていないかったが、青年は気にせず続けた。

「次にどのようなゲームか。このゲームは基本的に何をしてもいいゲームだ。商売を始めてもいいし、宿屋でのんびりくつろぐのもいい。RPGみたいに冒険してもいいし、なんなら悪に染まってしまってもいい。そんなゲームさ」

美由紀がここで始めて質問した。

「じゃあ、私は何をしてもいいの？」

「ああ。ぼんやりと気ままに歩き回って、期限が過ぎるのを待っていることも出来る」

「期限？」

「このゲームには期限があるのさ。大体一ヶ月ぐらいかな？その期限を過ぎると、俺達は現実世界へ戻されてしまう」

さらに青年によると、こつちの世界では一ヶ月近く経っているが、現実世界では三十分ほどしか経っていないのだそうだ。

「一ヶ月もここにいろの？」

美由紀が驚きの感情を交えて青年に質問をした。

「安心しろ。なにもずつとホームレスのような生活をしろとは言っていない。職業に就いて、仕事をしていたら、一ヶ月なんてあっという間さ」

「でも私……仕事なんてしたことないし……」

「大丈夫だ。何の能力もなくても、仕事はさせてくれる。今からお前にこの世界の戸籍書を書かせるから、やりたい職業を選べばいい。ちゃんと職業の紹介もあるから、安心しな」

青年はソファから立ち上がると、大きな机の上にある紙の一枚を手に取り、美由紀の目の前の机に置いた。その後、ボールペンも

置いてくれた。美由紀はボールペンを手に取り、紙に書いてあることを読み始めた。

まず、名前。早速本名を書こうとしたが、名前の注意書きに、偽名でも良い、と書いてあったので、普段使っているチャットネームを書いた。次に年齢、身長、体重、他3サイズなど。なるほど、ゲームなのでどんな姿になってもいいわけだ。しかし、美由紀は今のままが良かったので、今の年齢や身長を書いた。(3サイズはわからなかったので、空けておいた)

最後に職業だ。もう最後かと思うかもしれないが、オンラインゲームもこのようなものだ。職業を書くところの下の方に、いろいろな職業の紹介があった。

商人、兵士、冒険家、遊び人、旅芸人、メイド、学生、魔法使い・
・
・
・

美由紀はあまりにも職業が多すぎるため、ソファアーに寝転がった。

第一話、巨人狩り(2)・・・ブレード

美由紀はさらに寝転んだ後に、ため息をついた。確かに無理もない。ざっと見て50近くの職業があるのだから。職業の最後の紹介に、「無職」とあったが、美由紀はすぐに書くことはしなかった。やはり一ヶ月近くこの世界に住むわけなのだから、何か面白い職業に就かないと、ゲームをプレイしている意味がないと美由紀は思っていた。

しかし、どの職業も面白そうな魅力が溢れているので、何を選べばいいか迷ってしまう。美由紀が迷っていると、青年が美由紀の前の机に、冷えた麦茶が入ったコップを置いてくれた。

美由紀はすぐにそのコップを手に取り、一気飲みした。

「やっぱり迷ってるか？」

「うん。どれにしたらいいか・・・」

「俺を参考に見てみるか？」

その青年の言葉は、美由紀にとっては「俺の職業を紹介してやるのか？」と言っているように感じた。美由紀は座りなおし、うなずいた。すると、青年は美由紀と向かい側のソファに座り、腰の鞘から剣を抜いた。剣は、白銀の色に身を包んだ細長い、片手剣だった。

「巨人狩りさ」

「へ？」

美由紀は巨人という言葉で頭の中が真っ白になった。ゲームによく出てくる、あの巨人だろうか。

「この町はな、夜になると時々、町の建物を壊しに現れるんだ。その巨人を俺達が退治するのさ」

「え？ちよつと待って。あなたの職業って案内役じゃないの？」

「ああ、案内役はな、誰でもできるんだよ。ただ、職業勧誘とかは新人が肝心って言うだろ？だから、俺は巨人狩りの勧誘役になったってわけ」

美由紀は、ふーん、とうなずいた。それと同時にある決意が生まれた。職業選択の決意である。いや、決意というよりは、ただ選ぶことが面倒くさくなったので、これにしようという決心である。

「やってみようかな。巨人狩り」

「お？やるか。だったらこのブレードを仲間にしないか？」

青年の名前はブレードというらしい。

「基本的に巨人狩りっていう職業は、団体で動く職業なんだ。一人よりもグループのほうが、情報が集まりやすいし、一人一人の生存率が高い。それに、中には一人では倒せない巨人もいるんだ。それでも一人や二人で行動している巨人狩りもいるけどな」

美由紀は再び、ふーん、とうなずいた。

「でも、本当にいいのか？もっと迷ってもいいんだぞ。一、三日考える人もいるぐらいだぜ？」

ブレードが美由紀を説得するように言ったが、美由紀は首を横に振った。

「いいよ。選んでたらキリがないもん」

美由紀はボールペンを手に持ち直し、職業を書くところに、巨人狩り、と書いた。

「そっか。まあお前が選ぶことだからな。反対はしないよ」

「でさ、この紙、どこに提出したらいいの？」

「お客様窓口だ。一緒について行ってやるよ」

ブレードが立ち上がったので、美由紀は紙を胸に抱え、ブレードの後をついていった。

お客様窓口というところは、美由紀がさっき行った大きな郵便局のような所だった。しかし、美由紀がいた場所は北側の所だったよ。うで、ブレードが行ったところは、東側窓口だった。

東側窓口は、人がほとんどおらず、受付にすぐ呼び出された。

「何のご利用になさいますか？」

「彼女の戸籍を作りたいんだけど」

ブレードが身振り、紙を出せ、と美由紀に合図したので、美由紀は背伸びをして、受付の人に紙を渡した。受付の人は紙を美由紀から受け取ると、カタカタとキーボードを打ち始めた。

その間、美由紀はブレードから巨人狩りのことについて話してもらった。

「巨人狩りの活動は主に夜だ。巨人は夜にしか現れない。だから、昼間は別の職業に就いている人が多いんだ。実際、俺も、俺の仲間もそうだしな」

「え、他にも仲間がいるの？」

「ああ、一人だけな。そいつがカフェを開こうとしている」

「ふーん。私も仲間に入れてもらおうつと」

「まあ、そのことは後だ。話を続けるぞ。巨人は滅多に人を襲わない。例えば巨人狩りでもだ。巨人はただ建物を壊そうと必死になっている。それを俺達が退治するのさ。だから怪我なんて滅多にないな。たまに建物のガレキが当たるぐらいだ」

「そうなんだ。じゃあ安心だね」

「ああ」

美由紀とブレードがしばらく待っていると、受付の人が丸い形をしたバッジを差し出した。

「それがコロナさんの会員証となります。その中にはポイントも入っていますので、紛失にご注意ください」

「はい」

美由紀はバッジを受け取ると、服の胸の近くにバッジを取り付けた。受付の人が言っていたポイントとは、この世界のお金のことだろう。「では、ゲームを引き続きお楽しみください」

ブレードは受付の人に一礼すると、東側の扉へと歩き始めた。

「ねえ、どこに行くの？」

「巨人狩りになったから、武器が必要だ。だから武器屋にいくぞ」
「はい」

美由紀は、今から遠足へ行くかのように、元気よく返事した。

「ところで、名前は？」

「コロナだよ。コ・ロ・ナ」

コロナの名前の由来は、美由紀が理科の授業で太陽について学んでいたとき、太陽のある部分の名前がコロナと書いてあった。この言葉がとても気に入ってしまったので、チャットネームなどで使うようになったわけだ。

「よろしくな。コロナ。俺はブレードだ」

「うん、こちらこそよろしくね。ブレード」

美由紀とブレードは薄暗い裏通りを歩いていった。

第一話、巨人狩り(3)・・・カフェ

武器屋は少し裏通りを歩いたところにひっそりと建っていた。周りが薄暗いせいか、少し不気味に感じる。ブレードと美由紀が武器屋の中に入ると、仙人のような姿をした老人が店員をやっていた。顔が全て白い毛でおおわれている。

「何か御用かな？」

「彼女に合っている武器が欲しいんだ。巨人狩り用の」

ブレードがそう言っていると、店員である老人は、美由紀をじっと見つめた。美由紀の中の能力でも探しているのだろうか。しばらくして、老人が見つめ終わると、老人はある方向に杖を指した。

「そのお嬢ちゃんには黒い物が合っているかもしれないのう」

美由紀とブレードは、老人が指した方向の後をたどった。そこには、机の上に銃がたくさん並べられていた。

美由紀とブレードは、その机の上から老人が言っていた、黒い銃を探した。意外にも早く見つかった。なぜなら、他の銃は銀色の物がほとんどで、黒い銃が一つだけあったのだ。

黒い銃は他の銃よりも一回り大きく、大きさから大体の重さも伝わってきた。

「手に取ってみるよ」

ブレードが言ったように美由紀は、黒い銃を手に取った。とても片手では持てない。両手でやっと持てるぐらいの重さだ。

「それぐらいのほうがよかろう。片手で持てるぐらいじゃと、狙いを定めにくいからのう」

美由紀の心を読み取ったかのように老人が言った。すると、ブレードが美由紀に耳打ちした。

「どうする？別に銃が嫌なら、剣とかにしてもいいんだぞ」

確かに、この武器屋には、いろいろな武器が机の上に置いてある。しかし、美由紀は首を横に振った。

「いいよ。これにする。銃が一番使いやすそうだし」

美由紀は銃を手にとって老人の方へ持っついていった。

「これにするよ。いくら？」

「弾と本体で、500ガラスじゃな」

老人はスーパーにありそうな赤外線を発する機械を、美由紀のバツジに向け、赤外線を発した。バツジは赤外線を受けると、ピピ、と音がした。バツジが赤外線に反応し、支払いを終えたに違いない。

老人は支払いを終えると、老人の着ている着物の袖から、銃の入った弾の袋を美由紀にさしだした。中にはきちんとして説明書が入ってあった。銃の弾の効果について書かれているのだろう。

「お買い上げ、ありがとう」

美由紀は近くにあった箱を手に取り、箱に銃を収めた。そして、ビニールの袋を同じく、近くにある所から取り、箱を袋の中へ入れた。

「よし、武器も買ったし、カフェに行くか」

「カフェ？」

「俺のもう一人の仲間がカフェを開くって言ってただろ？そいつに会いに行くのさ」

ブレードが武器屋を出たので、美由紀も袋を抱えてブレードに続いた。

カフェは路地から外れた所にひっそりと建っていた。小さな店で、まだ開店していないようだ。ブレードがカフェのドアを開くと、ドアについていた小さなベルが鳴り響き、店内に客が入ってきたことを知らせた。その後、若い女性の声が聞こえた。

「あ、おかえり」

ブレードと美由紀が中に入ると、魔法使いのコスプレでもしているかのような姿をした女の人が、サイドテーブルの席に座っていた。

「見つかったの？」

「ああ。かわいいお嬢様だぜ」

女の方はイスから立ち上がり、美由紀の顔をのぞいた。

「ほんとだあ、かわいい。ねえ、お名前は？」

「コ・・・コロナです」

美由紀は少し緊張した口調で言った。

「ふーん。コロナちゃんかあ。ブレードに連れてこられたってことは、巨人狩りになったんでしょ？わからないことがあったら、何でも聞いてね」

美由紀はコクリとうなずいた。

「じゃあ、まずは自己紹介と行きましようか」

女の人はまず、自分の事を紹介した。

「私はレミル。この姿どおり魔法を使うわ。得意なのは料理と援護魔法。以上」

(自分で企画したコーナーなのに、やけに短くない?)

「俺はブレード。名前の通り、剣が得意だ。接近戦なら任せな。ちなみに得意なのはコーヒー作りだ」

最後に美由紀の順番が回ってきた。

「私はコロナです。えーと、得意なことはこれとってありません。一応、銃を使います」

美由紀は、自分なりに自己紹介をしたつもりだったが、レミルが不満げな顔をしていた。

「ブレード、コロナちゃんが緊張しっぱなしじゃない！ちゃんと慣れる空気を作らないと」

「お・・・俺のせいだよ」

レミルが、ブレードを自分の目の前に正座させ、説教を始めた。なぜブレードを説教するのかわからなかったが、下手に首を突っ込まないほうがいいだろう。美由紀はブレードがレミルに説教されている間にカフェを見渡した。

レミル、ブレードの他に店員もいなければ、大きなピアノが置いてあるのに、ピアノをひいた形跡はどこにもなかった。どうやら、本当にまだ開店していないようだ。

「このカフェはいつ開くんですか？」

美由紀が、ブレードとレミルの説教が一段落した隙に聞いた。

「まだカフェが建っているだけで、いつ開店とか考えてないんだよ。店員さんっていつても、私とブレードしかいないし……っていうところでコロナちゃんがやってきてくれたわけ」

レミルはニコニコと美由紀に微笑んでいた。まるで何かを誘うような笑顔だ。

「まあカフェの中を見てみてよ。スペースは一応広く取ったんだけど、人数が足りないんだよねえ。私はオーダー品を作る係。ブレードはサイドテーブルの係。そこまでは決まっただんだけど、他のテーブル席に品を運ぶ人、つまりウェイターとかウェイトレスの係がいなかったんだよねえ」

すると、レミルが美由紀の両肩をたたいた。

「コロナちゃん、やってくれるかな？ちゃんと服は用意してあるから」

レミルの目が輝いていたので、断るわけにもいかず、こつくりと美由紀はうなずいてしまった。

「よし、そうと決まれば早速、服を着てみて。サイズを確かめなきゃ」

美由紀はレミルに腕を回され、ほぼ強引にレミルの部屋へと運ばれていった。

第二話、ゼロ（1）・・・開店

レミルに個室へ連れて行かれて十分が経ったとき。

「うん。似合ってるわ、コロナちゃん。これなら看板娘としても最適ね」

レミルが恥ずかしがっている美由紀を連れて、個室から出てきた。

美由紀は顔を真っ赤にして、下を向いている。ブレードは驚いて口笛を軽く吹いていた。

「もうせつかくだから、普段着にしちゃいなさいよ」

「ええ!？」

美由紀が恥ずかしがっているのも無理はない。レミルが美由紀に着せたのは、メイド服だからだ。外国でよく家政婦が着ていそうな服であり、頭にはカチューシャをつけてられている。スカートの裾がひざまであったのが幸いだった。ミニスカートだと、おそらく頭が沸騰してしまっていただろう。

「冗談よ。でも、普段着にしても悪くないと思うけどなあ」

レミルは鼻歌を歌いながら、自分の部屋へと入っていった。美由紀がため息をついていると、ブレードが話しかけてきた。

「嫌なら着替えてもいいぞ。あいつの言うことなんか、真に受けないほうがいい。」

ブレードは呆れる口調で言った。しかし、美由紀はすぐに着替えようとはしなかった。これも非日常の出来事の一つなのではないだろうか。もし、今すぐに着替えてしまうと着せられただけで終わってしまうかもしれない。美由紀の頭にそんな考えが浮かんだのだ。美由紀が着替えるべきか迷っていると、ブレードが小さなタオルを放り投げてきた。美由紀は慌ててそのタオルを受け止めた。

「テーブルとか拭いてる。あいつ（レミル）に何か言われなくて済む。俺はサイドテーブルを拭くからよ」

美由紀はこっくりとうなずき、丸い木でできたテーブルを拭き始め

た。

美由紀が十個の全てのテーブルを拭き終わると、タイミングよくレミルが部屋から出てきた。手には一枚のA4の紙を持っている。「おっ、テーブル拭いてくれてるじゃん！感心、感心。ちょっと集まってくれろ？」

美由紀はタオルをテーブルに置き、レミルが座った、サイドカウンターの席の隣に座った。ブレードはいつのまにかタキシードに着替えており、コップなどを洗っている最中だった。ブレードがコップを洗うことを止め、レミルの側まで歩いていくと、レミルが話し始めた。

「巨人狩りのグループ結成書なの。書いてくれる？」

レミルが持っていた紙を美由紀の前に置くと、後から万年筆も出された。

美由紀が紙の内容を見ると、次のようなことが書かれてあった。

グループ名、グループのメンバーの名前、グループの主な拠点、そしてグループのリーダー。

「書ける所だけでいいんですか？」

「うん。グループ名とリーダーはまだ決まってるからね。名前だけ書いてくれる？」

見ると、レミルの名前がすでに書かれてあった。主な拠点場所は、カフェ「ネルストン」、と書かれてある。美由紀は万年筆を持ち、レミルと書かれてある所の下に、コロナと書いた。危うく自分の本名を書いてしまいそうで、冷や汗をかいた。

美由紀が書き終わると、ブレードに紙と万年筆を渡した。ブレードはさつと万年筆を手に取り、スラスラと名前を書いていった。おそらくこのゲームに結構住み慣れているのだろう。

ブレードがレミルに紙と万年筆を渡すと、レミルは「ありがとう」と言い、紙を見つめ、ため息をついた。

「グループ名がなかなか決まらないんだよねえ。それとリーダーと」「グループって言うけど、実質三人だしな」

「そうなんだよねえ」

レミルは再びため息をついた。悩んでいるレミルの姿は珍しい、とブレードは思った。レミルと手を組んで十日近くになるが、ため息をつきながら悩んでいる姿は見たことがないからだ。

すると突然、レミルが立ち上がった。

「そうだ。コロナちゃんも仲間に入ったことだし、今日開店しよう。ブレード、いつでもコーヒーを作れる準備をして」

「あの・・・私、何をすれば」

「大丈夫よ、コロナちゃん。運び方教えてあげるわ」

ブレードは何も言わず、ただ黙々とコーヒーを作り始めた。美由紀は不安ながらも物運びやサービスの仕方などをレミルから教えてもらった。レミルがとても丁寧に教えてくれたので、ウエイトレスとしてはほぼ完璧になったのだが、本当に開店していいのかという不安が残った。

「あの・・・本当に開店するんですか？」

「大丈夫よ。メニューはできてるし、全部私の得意料理だから」

「そうじゃなくて・・・私、ウエイトレスなんか初めてだし・・・不安なんです」

「じゃあ聞くけど、言葉使いが荒かったことや、うつかり物を運んでいるときに、転んで落としてしまったとかいう回数多い？」

「少ないです。けど・・・」

「いいからやってみなさい。やってみないことには、何も生まれないわよ。仲間でしょ？困ったときはフォローしてあげるから」

レミルに肩をたたかれ、美由紀は、少しだけやってみようかな、と思っ

「わかりました。やってみます」

レミルは「がんばれ」と美由紀に白い歯を見せて笑った。

午後三時過ぎ（もちろんゲームの世界の時間だ）ちょうどおやつ時の時間である。レミルがカフェの入口のドアについている小さな看

板を裏返し、OPEN（開店中）という文字を外に知らせた。カフェの中を改めて見渡すと、サイドテーブルには九席、テーブル台は十台ある。一つのテーブル台にはイスが四脚あり、約50名の客が入れることになる。

注文品を上手に運べるかどうか不安だが、やってみないとわからない。

美由紀がそう自分に言い聞かせながら、ブレードとチェスをしていると、一人の初老の男性が入ってきた。ドアのベルが、カフェ中に客が入ってきたことを知らせる。美由紀は、はっと我に返り、自分がウエイトレスであることを思い出し、男性の方へ近づいていった。

「い……いらつしやいませ。お一人様ですか？」

レミルに教えられたとおりの言葉を言ったが、ウエイトレスの仕事は人生初体験なので緊張してしまい、なかなか口から言葉が出てこなかった。

「ああ、そうだが」

「ではサイドテーブルの方へお座りください」

男性は「ありがとうございます」と言った後、サイドテーブルの真ん中の席に座った。男性は紳士のような服装をしており、頭に着けていた帽子をカウンターに置くと、メニューも見ずにブレードに「コーヒー」とだけ言った。

「かしこまりました」

ブレードはそれだけ言うと、黙々とコーヒーを作り始めた。しばらくの沈黙が流れる。

美由紀はこの沈黙がやけに長く感じた。つつ立っているだけだと何かしなければいけないような空気が漂う。その様子にいち早く気づいたのはテーブル台のイスに座っているレミルだった。レミルは美由紀にウィンクした後、ピアノの方を指差した。なるほど、ピアノの手入れをしてくれ、ということか。美由紀はポケットから台ふきんを取り出すと、ピアノの方へ歩いていき、ほこりがかぶってい

る部分を丁寧に拭きはじめた。

五分ぐらい経った後、ブレードが「どうぞ」と男性にコーヒーをすすめた。どうやらコーヒーが出来たらしい。レミルはテーブル席から緊張でひきつった顔をしながら、男性を見つめていた。気持ちはわかる。この男性のコーヒーの評価によって、このカフェの人氣が左右するからだ。美由紀もピアノを拭く途中の体制で男性を見つめていた。

そして、男性は三人に見つめられながら、ゆっくりとコーヒーをすすった。

第二話、ゼロ(2)・・・初巨人狩り

「なかなか美味しいな、このコーヒーは。君が作ったのだろうか？」

男性はコーヒーをすすった後、唐突にブレードに話しかけてきた。

「ええ、そうですけど・・・」

「ブレンドとかも君がしたのかね？」

「ええ」

「ふうむ、そうか。いや、実は私は新店舗を歩き回っている者なんだがね、ついでに店の宣伝会社の社長でもあるんだよ。よろしければこのカフェを広めてみたいのだが、どうかね？」

ブレードがレミルに、どうする？と身振りで知らせた。レミルは少し考えた末、立ち上がって男性の方に頭を下げた。

「是非、よろしく願います」

ブレードも頭を下げたので、美由紀もつられて「願います」と頭を下げた。

「よしよしわかった。ところで、あのピアノは誰か弾くのかね？」

男性はピアノを指差した。指差した先が美由紀にも当たっていたので、美由紀はさっとピアノから離れた。

「いえ、今のところは誰も」とレミル。

「弾かせてもらってもいいかね？」

男性はすでに上着を脱ぎ始めていた。どうやらやる気満々のようだ。「どうぞ」

男性はイスから立ち上がり、コーヒーを一気飲みすると、ピアノの方へ歩いていった。歩き方などからして、相当ピアノを熟練していることがわかった。とにかくオーラがすごい。

男性はピアノの席に座った。けんばんの上には羊毛で出来た赤色のカバーがかぶさっており、それを丁寧にピアノの上に置くと、男性はゆっくりとけんばんの上に指を置いた。

静かで雄大な風景を思い浮かばせる音色が、カフェを包み込んだ。

知らぬ間に美由紀は目を閉じて聴いていた。今まで音楽にはまったく興味はなかったのだが、この音色にはかなわない。とにかく自分の耳がその音色を聴こうと必死になるのだ。ブレードはいつものように目で男性を見つめており、レミルは美由紀と同じように目を閉じて聴いていた。

五分後、男性はピアノのけんばんから手を離れた。美由紀とレミルはパチパチと手を叩いて男性に拍手をしていた。ブレードもつられて拍手をしている。

「いやあ、ありがとう、ありがとう。コーヒーおいしかったよ」

男性は自分の上着と帽子を身につけ、カフェから出ようとしていた。

「あの・・・」

レミルが男性を呼び止めた。男性はレミルの方にゆっくりと振り向いた。

「その・・・広めてくれるのはありがたいんですけど、あまり広めすぎないでくれますか？この従業員、この三人しかいないんで」

「はっはっは。承知した」

男性はレミルに微笑むと、カフェから出て行った。

「はあ、よかったなあ。あのピアノ」

「ほんとだねえ。モーツァルトとかも凄いけど、ああいうピアノストにはあこがれちゃうなあ」

美由紀とレミルがさつき聴いた音色にうっとりしていると、ブレードはすでに男性が飲んだ後のカップを洗っていた。美由紀はここまではと我に返った。

「ねえ、レミル。あの紳士さんお金払ってないよね？」

「ああ、大丈夫よ。お店作ったときに、お店の入口にセンサーがつけられてね。お客さんが退室したときに、自動精算される仕組みになってるの」

「そう、よかった」

美由紀はほっと胸をなでおろした。

その後しばらくの間、客が入ってこないで、美由紀がブレード

とチエスの続きをしていると、突然、続々と客が入ってきた。どうやらもうカフェの情報が広まったらしい。さすがゲームの世界だ。情報が広まるスピードが並じゃない。

美由紀は深呼吸をした後、ウェイトレスの仕事に努めた。

午後六時にネルストーンは閉店した。ほんの三時間足らずの営業だったが、三人にとっては、急に客が殺到したので拷問に近い営業だった。(もっともそう思っているのは美由紀だけだったかもしれないが)

美由紀はブレードが出してくれたオリジナルティーをすすりながら休憩をしており、レミルは今日の売上計算をしていた。ブレードは相変わらずコップを磨いていた。(よく飽きないなと美由紀は思い続けている)

「これを毎日やるんだよね？」

「ああ。正直バイトよりきついだろうな」

美由紀は、はあ、とため息をついた。

「まあ何でも慣れるのが一番だ。慣れるのに時間がかかるけどな」
小学六年生の私が慣れるのにどれだけ時間がかかるのかねえ、と美由紀が思っていると、遠くの方から物を壊すような音がかすかに聞こえた。

美由紀が音の方へ振り向いたと同時に、ブレードはピアノの近くに置いてあった剣を取りに行き、レミルは近くのテーブルに置いてあった杖を手に持っていた。

「え・・・え？何が起こったの？」

「巨人が現れた。俺達は先に行ってる。用意ができてから来な」
美由紀が混乱していると、ブレードとレミルがカフェから出て行った。ちりん、と鈴が鳴り響く。カフェの中にいるのは、混乱している美由紀だけになってしまった。

美由紀は混乱を沈めるためいつもどおり深呼吸をした後、きれいに箱詰めされた銃を取り出し、説明書を読みながら弾をこめた。ど

うやら六発まで入るようだ。弾をこめ終わると、美由紀はカフエから出た。

カフエから広い路地に出ると、巨大な黒い物体が、建物を鋭い爪で破壊していた。

（え？まさか・・・あれが巨人！？）

美由紀の想像では、ゲームに出てきそうな一つ目で原始人のような姿を想像していた。しかし、美由紀の目の前で暴れているのは、巨大な黒い姿をした、まるで影と一体化しているような巨人だった。

巨人だという証拠に、巨人の足元でブレードとレミルが戦っている。ブレードは巨人の足元で剣を振り回しており、レミルは小さな詠唱をして、小さな火の玉を飛ばしていた。

美由紀は銃を両手で構え、引き金を引いた。入れていた弾の一発が巨人に向かって飛んでいき、巨人の胸元に当たった。すると弾が突然爆発を起こした。痛みあまりのせいか巨人は胸元を抑えながら倒れこんだ。その間に美由紀はレミルの隣へ移動した。

「すっごーい！すーいわコロナちゃん！」

レミルが感激しながら美由紀の肩をバンバンと叩いた。少し痛かったが、人の役に立てたことが美由紀にとって嬉しかった。ブレードはチャンスとばかりに巨人に向かって高々とジャンプした。巨人めがけて剣を振り下ろすつもりだ。

「だああああー！！！」

ブレードは重力に体を任せたまま、巨人めがけて剣を振り下ろした。巨人は真つ二つに縦に割れ、液体へと変化した。刹那、液体になった巨人は夜の影へと消えていった。

第二話、ゼロ(3)・・・ジャンク

「やるじゃないか」

夜の路地のどこかから、小さな子供の声が聞こえた。声からして、美由紀と同じぐらいの年だろう。

美由紀たちがその声の正体を探していると、ブレードの目の前にフードで顔を覆った少年が暗闇から現れた。背は美由紀と同じぐらいで、みすばらしいローブのようなものを着ていた。

「誰だ、お前は？」

「おつと失礼。僕の名前はジャンク」

ジャンクはフードで顔の様子がわからなかったが、明らかに冷たい笑みを浮かべていることがわかった。

「それにしても大したものだよ。この巨人を、こつもあつさりと倒すとはね」

「あなたも巨人狩りなの？」

レミルが尋ねると、ジャンクはクスクスと笑い始めた。

「巨人狩りも何も、さっきの巨人を作ったのは僕だよ」

「ど・・・どういうことだ？」とブレード。

「最近の巨人に、少しおかしいところがあったかい？」

ジャンクはまるでわかりきった答えを質問しているような口調で言った。レミルがジャンクの言葉を聞くと、はっとした顔になった。

「確かに・・・最近の巨人はおかしすぎる」

「ちよつと、それどうということ？」

「巨人は主として人を襲ったりしないって前に聞いたよね？それが、最近の巨人は普通に人を襲うようになってる。建物を壊す数も、半端じゃないわ」

ジャンクは高々と笑い始めた。

「あつはつは、その通りさ。人を襲うようにしたり、建物を壊す数を増やしたり仕向けたのは、この僕さ」

「てめえ、何でそんなことをするんだ!？」

ブレードが口調を強めて言った。

「だっておかしくないかい？巨人が人を襲わないなんておかしく思わないのかい？もう少し建物を壊すはずだとか思わないのかい？」

「何が言いたい？」

「よりリアルなゲームにしたほうが面白いなんて思わないかい？」

ブレードとレミルはジャンクから少し身を引いた。ジャンクの笑みが、とても強力な邪気を放ち始めたのだ。

「だからって、関係ない人を殺すことはないでしょう？」

美由紀が一步踏み出してジャンクに言った。ジャンクの邪気が人を近づけさせないのに、美由紀は負けなかった。

「う・・・うるさい！僕がどれだけ嫌な思いをしてきたかわかっているのかい？これはあくまでゲームだ。やつあたり程度に人殺しをしてもいいじゃないか」

美由紀は表情を変えなかったが、心の中で呆あきれていた。

「ジャンク、あなたイカれてる。例えゲームの世界でも人殺しをしてはいけないと思う。あなたがどんな嫌な思いを持って生きてきたのか知らないけど、人殺しをすることは絶対間違ってる」

「うるさい！目障りだ。消えてしまえ!!」

ジャンクは暗闇に手をあおいだ。すると、暗闇の地面の部分から巨人が作られていった。

一人、二人・・・

知らぬ間に美由紀たちは五人の巨人に囲まれていた。一人の巨人の頭の上にはジャンクが乗っており、美由紀たちを見下ろしていた。

「消えてしまえ!」

巨人達が唸うなり、美由紀たちに襲い掛かってきた。

ブレードが一人の爪を剣で受け止めた。(その巨人はジャンクが乗っている巨人だ)しかし、圧倒的に巨人の爪の方が強かった。負けるのも時間の問題だろう。すると、もう一人の巨人の爪がブレードの背後に襲い掛かった。美由紀はその爪めがけて引き金を引いた。

弾が爪に命中し、爆発する。その巨人はウウツと呻きうめひざまず跪いた。

レミルは詠唱を始めていた。残りの三人の巨人達はそれに気づいたのか、レミルめがけて爪を振り下ろした。美由紀はくるりと振り返り、引き金を引いた。三人の中の一人の巨人の足に弾が命中した。弾の周りが急速に冷却され、巨人の足全体を凍らせる。巨人は急速な冷却に耐えられなかったのか、レミルを襲うことをやめ、体をもがき始めた。

続けて二人の巨人に打とうとしたのだが、反動のせいで引き金が引けなかった。だめだ、間に合わない。二つの爪がレミルに襲い掛かる。レミルは詠唱に集中しており、襲われていることに気づいていない。

(レミル……!)

美由紀は目を閉じて、心の中で叫んだ。

爪で切り裂かれた音がしない。美由紀の耳が切り裂かれた音を聞こうとしなかったのだろうか？美由紀は思い切って目を開いた。そこには両腕をもぎ取られた二人の巨人が立っていた。

巨人達は痛みあまりに悲鳴をあげている。美由紀は一瞬何が起こったかわからなかった。

もぎ取られた両腕は、まだ詠唱を続けているレミルの近くに落ちていた。ブレードはまだ負けまいと巨人の爪と戦っている。美由紀は目を閉じて何もしていなかった。

一体誰が……？

するとレミルの側に見知らぬ影が現れた。黒マントに身を包み、顔には仮面をつけている。手には刃の長さが二十センチぐらいのナイフを持っていた。身長は165センチメートルぐらいだ。体格からして女性だろう。ジャンクはその姿をして舌打ちしていた。

「チツ、ゼロか」

ゼロと呼ばれた女性はゆっくりとジャンクの方に振り向いた。

第三話、ファミリー（１）・・・仲間

ゼロがジャンクの方に振り向いたと同時にレミルの詠唱が終わった。

「ホーリーウエーブ！」

レミルが杖を上にかざすと、レミルの杖からオレンジ色の光が全方向に照射し、美由紀、ブレード、レミル、ゼロの四人の体を包み込んだ。

急に美由紀の体に力がみなぎってきた。体も軽くなった気がする。するとブレードが巨人の爪をはじき、その隙に巨人の両腕を切り落とした。

美由紀はその間啞然としていた。いつも行っている掲示板で書かれてあった、ゼロと呼ばれるものがすぐ目の前にいたからだ。とにかく目の前の光景が信じられなかった。

「全体強化呪文よ。待たせてごめんなさい」
レミルが勝利の笑みを浮かべながら言った。相当呪文に自身があるようだ。

巨人は再び襲い掛かった。しかしゼロだけに、だ。ゼロは目に見えぬ速さで走り、美由紀がまばたきをした時には、ゼロはすでに巨人の一人の肩に乗っていた。次にまばたきをした時には、ゼロは次の巨人の肩の上に乗っており、さっき乗っていた巨人は無惨にも粉々に切り刻まれていた。ほんの五秒足らずの出来事である。

その調子でゼロは次々と巨人を倒していき、最後にはジャンクが乗っている巨人を切り刻んだ。ブレードがさつき両腕を切り落とすので、その巨人は何もすることができず消えていった。

ジャンクは軽く舌打ちをしながら近くの建物の屋根に飛び移った。すかさずゼロがナイフを構えてジャンクの目の前に現れる。ゼロはジャンクの心臓目がけてナイフで切り払った。

ジャンクは後ろへ身を引き、ナイフをかわした後、暗闇の中へ手

を伸ばし、暗闇の剣を作り出した。

ゼロがナイフをジャンク目がけて振り下ろす。ジャンクは暗闇の剣でそのナイフを受け止める。しばらくゼロとジャンクの打ち合いが続いた。ナイフと暗闇の剣がぶつかり合っては火花を、飛び散らす。

ゼロの方が明らかに優勢だ。ジャンクが追い込まれるように攻められている。

美由紀はようやく我に返り、ブレードがよろよると右肩をひきずりながらレミルの方へ向かっていることがわかった。どうやら右肩を怪我しているようで、ブレードはレミルの前で座り込んだ。

「だ・大丈夫？」

「巨人に押され続けたからな。出血とかはしていないが、筋肉が痙攣^{れん}してる」

レミルはブレードの言葉を聞くと、すぐに詠唱を始めた。美由紀はゼロの跡を追って走り始めた。

ゼロは素早い動きでジャンクを攻め続け、とうとうジャンクを建物の壁に追い込ませた。

ジャンクは壁にへたり込み、首にはゼロのナイフの先が突きつけられている。

「さあ、速く殺^やれよ。ナイフが冷たくてかなわないんだ」

「・・・巨人を元に戻すなら・・・殺^やらない」

ジャンクは高々と笑った。

「僕がそんなことをすると思うかい？」

ゼロは唇をかんだ。できれば人殺しはしたくない。

すると、ゼロの顔の横から一つの弾が通り過ぎ、そのままジャンクの頭の真上の壁が爆発した。と同時に、ゼロの背後の暗闇の中から小さな影が現れた。その手には黒い銃を持っている。

「ゼロが殺さないんだったら、私が殺す。次は当てるわよ」

美由紀はジャンクに銃口を向けた。

ゼロは思わず美由紀の方に振り向いた。おそろく壁を爆発させた人を確かめたかったからだろう。すると、ジャンクがチャンスとばかりに暗闇の空気に手を触れ、それを自分が覆いかぶさるように包み込んだ。まるでマントに身を包むような・・・

ジャンクが暗闇に身を覆うと、ジャンクの姿は消えていた。美由紀が背後に気配を感じたと思うと、ジャンクの姿は知らぬ間に美由紀の背後に立っていた。ゼロは「しまった」とでも言いたそうな様子になっている。

「ありがとう、感謝するよ。小さなメイドさん」
ジャンクはそれだけ言うと、暗闇の中へと消えていった。

ゼロがジャンクの後を追おうとしたが、美由紀がゼロを止めた。

「ゼロ・・・さん」

美由紀は自分よりも年上の人に、呼び捨てで呼んではいけないと思いい、付け加えた。

「・・・ゼロでいい」

「ゼロ、ごめんなさい。あのままジャンクを殺したかったんでしよう?」

ゼロはしばらく間を置いてからこっくりとうなずいた。どうやらあのまますぐに殺す気ではなかったようだ。

「でもね、それは間違ってると思う。人を殺すことはどんな世界にいてもいけないことと思う。例えばそこがゲームの世界であってもね。あなたとジャンクに何があったのかはわからないけど、ジャンクを許し、ジャンクの心の闇を失くしてあげるべきじゃないかな?」

ゼロは何も言わなかった。

「少なくともあなたにはなってほしくない。あなたは私たちを助けてくれた。その優しい心を、人殺しをして闇に染まってほしくないな」

「・・・」

ゼロはまだ黙ったままだった。しかし、やがてゼロは顔を少しうつむけた。美由紀の言葉が通じたに違いない。

「はい、真面目まじめな話は終わり。せっかくだからさあ、私たちのチムムに入らない？」

美由紀の両手はいつのまにかゼロの右腕をしっかりとつかんでいた。

第三話、ファミリー（2）・・・危機

ブレードの治療をレミルが終えた後、美由紀はゼロを連れてネルストーンに戻った。

ネルストーンに戻ると、ブレードはふらふらと自分の部屋へと入っていった。傷が治ったとはいえ、まだ完全に体が治ったわけではないようだ。レミルも見た限り疲れている目をしていて、どうやら人を治療する魔法は、かなりのエネルギーを消耗するようだ。

「後片付けとかは私がやっておきますから、先に寝てください」
美由紀がサイドテーブルに座っているレミルに話しかけた。さつきから眠そうな顔をしている。

「でも、ウエイトレスさんに全部任せるのは・・・」
「疲れているときは無理しないほうがいいですよ」
よく美由紀の兄がお母さんに言っていた言葉だ。

ある日、お母さんが病気になったときに、お母さんは無理してまで自分たちのご飯を作ろうとした。しかしそんなお母さんの様子を見て、兄はこう言った。

「無理すんな。余計に体壊してしまうぞ」

その後、兄はご飯を意地でも作りたがるお母さんを説得させ、ベッドに寝かせた。

確かそのときの朝ごはんは、白米とインスタントの味噌汁だけ。

「ありがとう。じゃあ甘えちゃおうかな？」

レミルは疲れた目で無理やり作った笑顔を美由紀に見せた後、ブレードと同じようにふらふらと自分の部屋へと入っていった。

ゼロはピアノの席に座っており、ピアノを見つめていた。

「使ってもいいよ」

ゼロが美由紀の方へ振り向いた。ゼロは仮面をかぶっているの、こっちを見られるとそれなりに怖い。

「話があるの」

美由紀はゼロから身を少し引いた。会った時はほとんど無口だったのに、今のゼロのギャップに驚いたからだ。

「そんなに怖がらなくていいわ」

ゼロはゆっくりと仮面を脱いだ。どこか見覚えがある顔だ。誰だろう？多分現実の世界でも会ったような気がする顔だ。

どこか違う。いや、メガネをかけたとしたら・・・

「まさか・・・智広さん？」

「こんばんわ。美由紀ちゃん」

美由紀は驚きのあまり尻餅ししもちをついた。

「あなたがここにいるとはびっくりしたわ。仮面のおかげで表情は隠せたけど」

(ゼロの姿が智広さんなんて・・・)

「どっちのほうの話しやすい？」

智広は仮面をつけたり外したりしている。仮面があるほうが話しやすいかどうかということだろう。

「じゃあ、なしで」

「うん、わかった。じゃあ今から大事な話をするからよく聞いておいてね」

智広はそう言った後、真顔になった。

「弟がね、大変な目に遭ってるの」

「正広君が？」

「うん。さっきのジャンクって子がいたでしょ？実はあの子が正広なの。あの子がゲームをプレイしたときに、何らかのコンピュータウイルスに感染したようなの。しかもそのウイルスはね、このゲームの世界を丸ごと破壊できるほどの力を持っているらしいのよ」

「何でわかるんですか？」

「そのウイルスがご丁寧に、自分のプロフィールを私のメールボックスに送ってきたのよ」

「そんな・・・正広君がそんなこと」

「正確には正広にのつとつたウイルスね。どうやらウイルスを巨人に少し埋め込ませてこの世界を破壊するつもりだわ」

美由紀は話を聞いてみると、ある一つの名案が浮かんだ。

「じゃあこの世界の人たちに協力してもらえば」

「残念ながらゲームを作った人にメールを送ったんだけど、本人は絶対安全だつて言い張るのよ。ちゃんとウイルスバスターをプログラムさせているからつてね」

「でも、この世界でプレイしている人たちに言ったら・・・」

「試してみたけど無理だったわ。お前はどうかしてるつとか、最初の説明書を読んだのか？ちゃんとセキュリティは万全だと書いてあったじゃないかつとか散々言われたわ」

「そんな・・・」

「そこで私はそのウイルスを消す、独自のウイルスバスタープログラムを作ったわ。それが美由紀ちゃん、あなたの持つてるその黒い銃なのよ」

美由紀はポケットから黒い銃を取り出した。両手で持たなければ持てない重い銃。これが本当にウイルスバスターのプログラムなのか

「これが？まさか」

「残念ながら事実よ。それは私がウイルスのプロファイルを参考にして作ったプログラム。その銃から打った弾は、ウイルスを一瞬で消し去る威力を持っている」

美由紀は少しうつむいた。何か智広に重大な使命を負わされたような気がしたからだ。

「美由紀ちゃん、ごめんなさいね。あなたをなるべくなら巻き込みたくなかった。でも選ばれたことを自覚して」

「でも、もしもこの世界が破壊されたらどうなるんですか？」

「・・・この世界にいるプレイヤー達は現実世界に戻れず、永久に何も無い電脳世界をさまようことになる」

「じゃあ、もしウイルスを倒すことに失敗したら・・・」

「私達は元の世界には戻れないわね」

智広が重々しいことをさらっと言ったので、美由紀の心が不安になった。

「あの・・・今日はもう寝かせてください」

美由紀は智広の返事も聞かずに自分の部屋へと入っていった。美由紀の背中に重々しいオーラを智広は感じた。智広はピアノのけんばんを閉じている部分を開き、静かに曲を弾き始めた。

曲が各部屋に鳴り響く。その曲はまるで眠っている者たちにさらに安らぎを与えるような曲だった。

しばらく智広はピアノを弾き続けた。きっと美由紀に使命を負わせてしまった罪悪感さいあくかんから逃避とうひしたかったのだろう。

「上手なのね、ピアノ」

仮面を取ったままの姿の智広の背後に、レミルが知らぬ間に立っていた。さっきまでレミルの気配などまるでなかったのにいつの間になんか。しかし智広はそんなことなど気にもせずピアノを引き続けた。

「いつからいたの？」

「魔法にワープっていうのと、シャドウっていう魔法があるのをご存知？」

「RPGで見たことはあるけど、詳しくは知らないわ」

智広はまるで「さっきまで何をしていたの？」と遠まわしに聞いたような口調だった。

「さっきの話、本当なのね」

「・・・ええ」

「じゃあ私達が協力してもいいよね？」

「ええ、でもこれだけは言っておくわ」

智広はピアノを途中で弾くことを止め、レミルの方に振り向いた。

「普通の戦いとは違うわ。ゲームオーバーの可能性など100%に等しいことを覚えておいてね」

レミルはフツツと笑った。

「百も承知よ」

第三話、ファミリー(3)・・・それぞれの時間

次の朝、美由紀が起きてカフェに出ると、サイドテーブルにレミルが座っており、ブレードがコーヒーと朝食を作っていた。智広は仮面をつけており、ピアノを弾いていた。クラシックの音がカフェを包み込んでいた。

「あ、おはよう。コロナちゃん」

レミルが美由紀が起きてきたのに気付くと、笑顔で挨拶あいさつしてきた。

「うん、おはよう」

美由紀はまだ少し眠気があったので、目を軽くこすった。

「いきなりなんだけどね、昨日の夜のこと全部聞いちゃったの」

「昨日の夜って？」

美由紀は、まさかとは思ったが一応聞いてみた。

「昨日ゼロと話してたでしょ？チヒロさんって言うんだっけ、その人からの大事なお話」

「どれぐらい聞いたんですか？っていうかどうやって？」

「魔法使いはね、姿を消す魔法と、壁などを通り抜ける魔法も覚えているんだよ」

その説明で大体はわかった。つまり美由紀達の近くにレミルがいたということだ。

「それでね、ジャンク君のことも聞いた。この世界が消えると大変なことになるってこともね」

美由紀が智広の方を向くと、まだピアノを弾いていた。

「聞いてしまったからには協力するしかないわ。だから朝ご飯食べた後、私とブレードはジャンク君の情報収集に行ってくるわね」

「どうやらブレードも知ってしまったようで、レミルが言っと、ブレードはうなずいていた。」

やがてブレードの特製サンドイッチの朝食が始まった。

朝食が終わると、レミルは洗顔と歯磨きをしに洗面所へと向かった。美由紀もついだと思いい、レミルについていった。

ブレードがレミルと美由紀を見送ると、ゆっくりとピアノを再び弾きつづけ始めた智広へと近づいていった。

「ゼロ」

智広は弾くことをやめ、ブレードの方へ振り向いた。

「話が全部聞いた通りなのだったら、お前とコロナはこのカフェから出ないほうがいい。なぜだかわかるな？」

智広は仮面をつけたままこっくりとうなずいた。どうやら大切な人材を失っては困るので、このカフェから一步もでるなというようだ。「わかつてくれるならありがたい。何かしたい気持ちはわかるが、我慢してくれ。コロナにも言っちゃってくれ」

智広がうなずくと、ブレードがにこりと笑い、洗面所へと向かった。ちょうど美由紀とレミルが終わった後だったのですれ違いだったのだ。

「あ、そうだ。気になってたんですけど、このゲームで仮に死んだらどうなるんですか？」

「あー、もし死んだらね、強制的に現実世界に戻されるんだって。そしてリアルを楽しませるためなんだろうけど、一度死んで現実に戻ったら二度とゲームには入れないんだって。だから私達は餓死とかしないようにご飯とか食べてるわけ。歯もちゃんと磨いておかないと、臭い息になっちゃうしね」

確かにリアルゲームなので当たり前のことなのかもしれないが、美由紀はゾツとした。

もし、自分がジャンクを倒さずに死んでしまうと、もう自分は何もできなくなり、ゲームの世界にいる人たちが消えていくのを、ただ見ているしかないのだ。次の日に智広さんが行方不明だと言われたら……いや、ひよつとしたら自分の兄にも同じことが言えるかもしれない。

美由紀は知らぬ間に自分の体をガタガタと震わせていた。

レミルはそのことに気づいたのか、震えている美由紀の体を、両腕で優しく抱きしめてあげた。

「大丈夫よ」

美由紀はなぜか、ヒックと息をつまらせながら泣き出していた。

「あなたの剣とも盾とも盾ともなつてあげる人たちがこのカフェにいるわだから安心して。何も自分一人で抱え込まなくてもいいわ」

レミルは手を伸ばし、美由紀の頭を優しく撫なでた。

「……くせに」

美由紀は涙声でつぶやいた。するとレミルは「え？」と聞き返してきた。

「選ばれたことなんかなくせに!!!」

美由紀はレミルを突き飛ばし、自分の部屋へと入っていった。ドアがバタンと閉められ、はつきりと鍵をしめた音が響ひびいた。

ブレードは「どうした？」とレミルに駆け寄ってきた。智広もドアが閉まる音がよつぽど大きかったのか、レミルの方へ駆け寄ってきた。突き飛ばされたレミルは、突き飛ばされた体制のままぼうぜんで呆然としていた。

「選ばれたことなんかなくせに、か」

レミルは静かにつぶやいた。ブレードが聞き返したが、レミルの耳には全く届いていないようだった。

「同情する権利なんか私達にはないんだろっね」

「おい、何があつたんだ？」

ブレードがレミルの肩を揺さぶった。レミルはよつやく我に返り、立ち上がった。

「コロナちゃんもきつと壁を越えてくれるわ。私達は私達で、今やれるべきことをやりましょう」

ブレードはまだ首をかしげていたが、レミルはそんなことなど気にしていなかった。

とにかく今やれるべきことをしたいという思いが、心に溢あふれていたのだ。

「ブレード、情報収集に行くわよ！」

レミルはブレードの腕をがしつと掴み、カフェの外へと出て行った。

ブレードは剣道場の目の前に立っていた。この剣道場は、ブレードがこの世界に来たときに初めて剣術を教えてくれた道場である。この師匠とは親しく、ブレードは再び剣術を教えてもらおうとここに来たのである。

実はレミルに連れて行かれた後、ブレードはレミルに一つお願いをした。「情報収集は一人でやってほしい」それがブレードのお願いだった。もちろんレミルは目を丸くした。しかし、理由を話すとすんなりと承諾してくれた。

その理由とは、今の自分の強さのことだった。昨晚の戦いで、今の自分は思ったよりも弱いということを実感した。さらに、これからのことを考えると、より過酷な戦いが起こるというのに、今のままでは完璧に足手まといになってしまう。それがブレードの剣道場に行く理由だった。しかし、レミルに一つ約束させられた。

「絶対に強くなつてないと、カフェには帰ってこなくていい。以上！」

レミルはその言葉を吐き捨てるように言った後、そのまま身を翻し、情報収集へと行ってしまった。

(確かに強くなってないと帰れないよなあ)

ブレードは少し不安を心に残しながら、道場へと入っていった。

「久方じゃのう、ブレード」

中に入ると、正座をしてブレードの方を向いている人がいた。

「ええ、お久しぶりです」

「ここに来た理由はわかっておる。早速修行へと移ろうか？」

「はい」

ブレードは道場に一礼した後、靴を脱ぎ道場の奥へと入っていった。

レミルは情報が行きかう、巨人狩り限定の酒場に来ていた。主には巨人狩りの人たちが集い、自分の持つている情報や自分の武勇伝を話したりする場所だ。

レミルはサイドテーブルの端っこに座っており、のんびりとウイスキーを飲んでいた。

どうやら、酒場は巨人の様子がおかしいことで話は持ちきりのようだった。

(さあ何から始めればよいのやら・・・)

レミルがゆつくりとため息をつくとき、隣の席に座っていた青年が話しかけてきた。

「あの、すみません。ここにレミルという人がいると思うのですが、ご存知ありませんか？」

「・・・あの、私ですけど」

「ああ、あなたですか。失礼いたしました。つととなるとコロナさん、ゼロさん、ブレードさんとご一緒ですね？」

レミルは席から離れ、青年を警戒する目つきで睨んだ

第三話、ファミリー(4)・・・兄

「そんな目で見ないで下さいますか？少なくともあなた方の敵ではありません」

青年がレミルを宥めるように言ったが、レミルは警戒を解かなかった。

「あなた・・・誰？」

「セージといます」

セージと名乗る青年は黒色の制服を着ていて、背中には何か細長い物を担いでいた。

「私の仲間とどういった関係？」

「すぐに答えを言ってしまうていいのですか？」

「どういうこと？」

「自分で答えを出したほうがスッキリしませんか？」

セージはそう言うのと席から立ち上がった。

「カフェに案内してもらえますか？ヒントは誰かの兄ということですよ」

セージは軽くカフェを案内しろと言っているが、レミルにとっては無理な要求だ。誰か知らない人を自分達の拠点に連れて行くことはかなり危険だ。実は嘘を言っていて、別の巨人狩りのスパイなのかもしれない。

しかしセージの目を見てみると、どうも敵だと断定できないのだ。セージの周りに、まるで自分を攻めさせないオーラを纏っているようだった。

「わかったわ。でもあなたが敵だとわかったときは容赦しないわよ」
「はい」

レミルはセージの返事を聞くと、酒場から出て行った。

「ま、最初から信じてもらおうということが無理だよな」

セージはぼそりと独り言をつぶやいた後、レミルに続いた。

(待ってるよ、中崎)

カフェに着くと、セージが不思議そうな目でカフェを見ていた。レミルが中に入ると、仮面をつけた智広が箒ほうきで床を掃いていた。

「おかえりなさい」

「あのさあ、仮面外すか、その服着替えてからお掃除とかして欲しいなあ」

「あ、ごめんなさい。後で着替えるわ」

セージはカフェの外を眺め終わったらしく、中に入ってきた。セージは智広セロの姿を見た途端、「おう」と声をかけた。

「やっと会えたな、中崎。いや、ゼロか？」

「あ・・・あなた、誰？」

智広は、中崎、という言葉に反応し、手に持っていた箒を落としてしまった。

「俺だよ、セージだよ。美由紀の兄貴の」

その言葉を聞くと智広は仮面を取り、驚きと嬉しさが混じった顔になった。

「よかった。来てくれたんだ」

レミルはセージと智広の会話に混乱していた。

「あの・・・コーヒー入れますね」

レミルは会話に入れないと悟ったので、コーヒーの準備を始めた。

「で、卒業のことでするさいお嬢様は？」

「それが・・・いろいろとあって・・・」

「わかった。本人から直接話を聞くとよ」

セージは吐き捨てるように言った後、洗面所の方へと歩いていった。洗面所の手前にそれぞれの個室があるのである。

「美由紀の部屋はどこだ？」

智広はある方向へ指をさした。その方向にあるドアをセージはドン

ドンと乱暴にノックした。

「美由紀、俺だ。二週間前にお前のコーヒー牛乳を飲んだクソ兄貴だ」

セージはしばらくノックを続けた。しかし、鍵が開くことはなかった。

と思いきや、ノックをやめてしばらく経つと、鍵が開いて中から美由紀が泣いた後の顔で現れた。

「おいおい、泣いた後の顔で合流するなんて中崎から聞いてないぞ」
セージは呆れるように言った。

第三話、ファミリー(5)・・・ケンカ

美由紀、レミル、セージ、ゼロの四人はサイドテーブルの席に座っていた。(ちなみにゼロである智広は仮面を外していた)四人のテーブルの前にはコーヒーの入ったカップが置いてある。

「お兄ちゃん、何でここにいるの？」

「中崎に頼まれてな。宿舎に着いたらすぐにプレイするように言われたんだ」

美由紀が智広の方を向くと、智広がこっくりとうなずいた。

「え？ちよつと待って。じゃあ智広さんは合宿に行つてないの？」

「ああ、なんか知らねえけど合宿には欠席してた。んで、バスに乗つてたらこいつからメールが来たわけ」

レミルが最大限に集中して話を聞いていたが、流星たすくについていけず頭が混乱していた。

「でさ、何が起こつたんだ？急に呼び出してきたもんだから何か起こつてるんだろ？」

どうやらセージはジャンクのことを知らされずにここにきたようだ。

「うん。実はね・・・」

智広は美由紀と出会ったことから話し始めた。途中、巨人狩りのことやジャンクの正体が自分の弟であることもかいつまんで話した。

レミルはやはり混乱していた。

「なるほどな。で、お前がたまたま選ばれたと」

セージが美由紀の方に視線を向けた。美由紀はこっくりとうなずく。「そんでもって選ばれたことのプレッシャーに負けて泣いていたと」

図星。

美由紀は息を少しつまらせた後に再びこっくりとうなずいた。

するとセージが美由紀の頭を叩いた。コントでツッコミを入れる程度の威力だった。

「いったあーい」

「いったあーい、じゃねえ。選ばれたからって泣くな」

「何よ、慰めてくれないじゃない。こんなかわいい妹が大変な目に遭っているというのに」

「何がかわいい妹だ。ゲームソフト勝手に盗んだのはお前だろ？きつと罰が当たったのさ。自業自得。因果応報」

陽気なセージとは反対に、美由紀は今にも泣きそうな顔をしていた。顔が再び赤くなる。

「まあ俺達がフォローしてやる。安心しろ」

「何よ！選ばれたことなんかなくせに！」

美由紀は立ち上がり、セージを見下ろすようにして睨む。すでに涙が頬の辺りを流れていた。

「フォローする人はいいよね。もしも失敗したらって気持ちなんか持たなくていいもん！」

セージも流石に頭にきたのか、立ち上がり美由紀の頬に平手打ちした。この平手打ちは本気だった。ぱちんという音がカフェ中に広がる。

「ふざけんな！じゃあもしお前が死んだらどうするんだ。フォローした意味がすべてなくなるんだぞ！選ばれたからって自分だけ特別になってんじゃねえ！」

セージが怒鳴った。兄が怒る顔を見たのは今回が初めてかもしれない。普段滅多に怒っていないせいとか、とても怖く感じた。智広もレミルも少し体をビクビクさせている。

「銃を貸せ」

セージは元の表情に戻っており、静かに美由紀に言った。

「え？」

「お前がやらないんだったら俺がやる。その銃がウイルスバスターのプログラムなんだったらな」

さらにセージは付け加えた。

「仮に俺が失敗しても文句は言うんじゃねえぞ」

「もうやめて。岩島君」

智広が静かにセージを止めた。

「美由紀ちゃんの好きにさせてあげて。無理に押し付けるのはよくないと思うわ」

「だから銃を貸してくれって言ってるんだよ。美由紀がやらないんだっいたら俺がやる」

美由紀はとうとう自分の部屋に入っていった。当然鍵を閉めてだ。

レミルはその姿をまるで痛々しいものでも見るような目で見ていた。「結局私に任せるんじゃない」

美由紀はベッドに寝転がり、再び泣き始めた。

「でも本当にどうするんだ？美由紀の銃しかウイルスバスターのプログラムはないんだろ？」

「うん。だから美由紀ちゃんにやってほしいの。あの子の銃の弾が一発でも正広に当たればウイルスを消去できる」

「でもさ、ちよつと辛いけど正広君をそのまま殺すことはいけないのか？そうしたら正広君も元の世界に帰ってウイルスも消える。ハッピーエンドと思うんだけど」

「正広はいいかもしれないけど、ウイルスはそのまま残るわ。だから他の人にまた感染する」

「なるほどな。ウイルスそのものを叩かなけりゃいけないってことか」

セージはため息をつき、たまたまレミルと目が合った。

「ごめん、話についていけなかったでしょう？」

「いえ、大体はわかりました。でも驚きです。あなたがコロナちゃんのお兄さんだなんて」

セージは美由紀のことをコロナと呼んでいるレミルに苦笑した。少し複雑な気分になったのだ。

「まあ、あいつがまさかゲームソフト盗むやつだとは思わなかった

な

「コロナちゃんってどんな子なんです?」

「あいつですか?」

セージは美由紀のことについてレミルに話した。智広はそれを懐かしむようにして聞いていた。きっとそんな子だったなあと思っ
ていることだろう。

第三話、ファミリー（6）・・・決意

「面倒見るのが大変な子なんですね」

レミルがクスクスと笑っていた。美由紀の昔話を聞いて思わず言っ
てしまったのだ。

「大変でしたよ、昔は。でもまあ」

セージは一息置いてからこう言った。

「あいつのおかげで今の自分が出来たと思うんですよ」

セージが微笑しながらレミルの方を向いた。

「そうですね」

レミルはまた微笑した後、イスから立ち上がり全員の個室の方へと
歩いていった。

「何しに行くんです？」

「そのかわいい妹さんに大切なことを教えておきます」

「下手に刺激しないほうがいいと思いますよ。あいつ、ああ見えて
結構繊細な神経していますから」

「じゃあ、なおさらです」

レミルは美由紀の部屋のドアノブを握った。やはり鍵はかかったま
まだった。

「ちょっと強引にいきますか」

レミルは目を閉じ、神経を集中させ詠唱を始めた。

短い詠唱を終えると、ドアがひとりでに開いた。レミルは鍵を開
かせる呪文を唱えたようだ。

部屋の中に入ると美由紀はまだベッドにつづくまっていた。レミ
ルを少し泣いた顔で見ている。

「何しにきたの？」

美由紀が涙声で静かに言った。

「出てっつて！」

美由紀は怒鳴った。他人と一緒にいたくないのだろう。

「わかったわ。でもこれだけは聞いて」

「あなたに何も話す権利なんてない！」

「何でああなたのお兄ちゃんがここに来たと思う？」

レミルは美由紀の怒鳴り声など無視して話し始めた。

「私から見てあの人はかなり慎重な人だわ。だったら現実で危険を冒してもここに来るような人じゃないと思う。でもね、チヒロさんのメールでセージさんは駆けつけるようにして来てくれた。危険を冒してまで」

「何が言いたいの？」

「あなたのお兄ちゃんね、人を信じ、人助けを生き甲斐がとしていのよ。チヒロさんのようなメールが来ても、誰も信じようとは思わないと思う。でも、あなたのお兄ちゃんはチヒロさんを信じ、チヒロさんを助けようとした」

美由紀は黙ってしまった。レミルの言っていることが本当だと悟さとつたのだ。例え兄本人の口から言われなくても美由紀にはわかる。兄はそんな人間だ。とにかく人助けをする。美由紀に対してもいろいろと助けてくれた。宿題といい、友達関係といつてもだ。

また、兄は物事を一人で溜め込んでしまう人だ。ある程度の物事は智広や他の同級生に頼ったりしているが、重い物事を背負ったときは誰にも力を借りようとはしない。反対に力を貸そうとしている人間を追い払っているぐらいだ。

そして、兄のもう一つの特徴は、他人に危険が迫ったとき自分が庇かばう。それは今の美由紀に対してされていることだった。

「銃を貸せ。お前がやらないんだったら俺がやる」

おそらく美由紀がやると言ってもこれと似たセリフを言っていただろう。美由紀の推測だと兄は無意識の内に智広やレミル達を戦いに加えないかもしれない。

「今は妹であるコロナちゃんがここにいる。だったらなあおさらよ。あの人は何があってもあなたを守ろうと必死になるわ」

美由紀はレミルが言い終わると同時にベッドから起き上がった。レ

ミルは「どうしたの？」とでも言いたそうな顔で美由紀を見ていた。
「お兄ちゃんを……止めなきゃ」

美由紀は涙を手で拭い、セージの元へと走っていった。

「お兄ちゃん！」

美由紀はセージの懐に飛び込んだ。座っていたセージは「ぐっ」と歯を噛みしめこらえた。

「な……なんだ？いきなり」

「お願い。私戦うから、一人で考え込まないで」

「ど……どういうことだ？」

「智広さんとかレミルさんとか戦わせようとしないう作戦とか考えてるんでしょ？そんなのやめて。これはみんなの問題だから」

セージの隣に座っていた智広が、えっ、と驚いた。

「い……岩島君！そんなこと考えてたの！？」

「そ……それは……」

セージの額から冷や汗が出来ていた。どうやら凶星らしい。

「岩島君。はつきりいつてこれはあなたの問題じゃないわ。これは私と弟の問題。なんだったらあなただけ現実世界に強制送還することだって出来るのよ」

美由紀の涙ぐんだ目と智広の説教をしているかのような目にセージは負けて

「ごめんなさい。反省します」

と頭を下げた。

「わかればいいわ。美由紀ちゃん、ありがとう。おかげで岩島君のことをちよつと知ったわ」

「いえ、そんなことは……」

レミルは三人が仲良く話している姿を見て、クスツと笑った。

（これでもうリーダーもグループ名も決まりね）

レミルは自分の部屋へ、巨人狩りのグループ結成書を取りに行った。

第三話、ファミリー（7）・・・告白

「みんなあ、ちよつとこれ見て」

レミルが右手にグループ結成書を持ってサイドテーブルの席に座った。テーブルに結成書を置くと、レミル以外の三人がのぞく様子にして結成書を見た。

「何ですか？これ」

レミルはウィンクして

「グループ結成書よ」

と言うと、万年筆でメンバーの欄にセージとゼロの名前を書いた。

「みんなに相談んだけど・・・」

レミルが美由紀、智広、セージを万年筆で指して続けた。

「リーダー誰がいいと思う？」

「それはもう美由紀ちゃんに決定でしょ」

智広が即答する。セージもうんとうなずいている。

「学校でもずっと班長やってるしな」

「よし、決まり！」

レミルが美由紀の言い分も聞かずに、リーダーの欄にコロナと書いた。別にリーダーにされても嫌ではなかったが、勝手なことするなあと美由紀は呆れていた。

「後はグループ名ね。何がいいと思う？」

レミルがテーブルに突っ伏して万年筆を指でクルクル回しながら言った。おそらく悩んでいるのだろう。なかなか決まらないのだと美由紀は思う。

「ここはリーダーである美由紀ちゃんに決めてもらったら？」

「俺達も考えようぜ」

セージがそう言ってみんなを考えさせる。美由紀もグループ名が何がいいか考え始めた。

思い始めると見知らぬ人にいろいろと助けてもらった。知ってい

た人にも助けてもらった。それはまさに家族のように思えた。そう、家族………

「ファミリィは？」

美由紀が小さく言うのと、三人が美由紀の方に視線を向けた。

「ファミリィってどうです？」

美由紀は繰り返した。

「それだぁー!!」

レミルが突っ伏した状態から体を起こし、万年筆でグループ名欄に早書きでファミリィと書いた。

「よし、完成！早速提出してくる！」

レミルはカフェを飛び出して行った。まるで新作のゲーム発売日で走っていく子供のような様子だった。

「でも何でファミリィって思ったの？家族って意味でしょ？」

智広が美由紀に聞いてきた。しかし美由紀は

「さぁ、なんとなく思っただけです」

と微笑しながら答えた。

しばらくの間、三人はいろいろと雑談をした。美由紀やセージの昔話をしたりもした。時々笑ったり、そんなこともあったなあと昔を懐かしんだりもした。智広も負けじと自分や正広の昔話をする。

話を聞いていると、本当に正広のことを大切に思っていることが感じられた。兄だろうが姉だろうがどんな形であれ、弟や妹を大切に思ってくれているのだと美由紀は思った。だからお兄ちゃんはこのに駆けつけてくれたんだ。美由紀は改めて兄の優しさが身に染み込んだ。

「なぁ中崎」

雑談がひと段落した時に、セージが真顔で智広を呼んだ。

「ちよつと大事な話があるんだけど、いいかな？」

智広が首をかしげてセージを見る。

「何々？大事なことってなぁに？」

美由紀が好奇心いっぱいまでセージに聞く。するとセージはフツと笑った。

「いいか？美由紀。男の子ってのはこうやって告白するからな」
美由紀の脳、運動神経、感覚神経全てが停止した。何が起こっているのかわからず、石のように固まってしまったのだ。

「中崎、俺はつきり言うよ。お前のことが好きだった。ずっとお前だけを見てた。ひよつとしたらお前じゃなかったら助けに来なかったかもしれない」

智広はきよとんとした目でセージを見つめた。

「だから……もう少し俺の側にいてくれないかな？上手くいえないけど……側にいてほしい」

智広は顔を赤く染めて下を向いた。セージと顔を合わせることが恥ずかしいのだろう。無理もない。いきなり愛の告白なのだから。

「一つだけ……約束してください」

智広は上手く言葉が出ない状態で言った。しかしセージはそんなこと気にしていなかった。

「私以外の人と……くつつかないください。私だけを……側に置いてください」

「ああ、わかった。元より承知なんだけどな」

セージが右手の親指をピンと立てて微笑みながら言った。智広はセージをぎこちなく見つめていた。しかし、やがて免疫のようなものができたのか、気がつけばセージに微笑み返していた。

カフェの中で成立した見つめあう少年と少女。この風景は恋愛の一場面としても合っているのではないだろうか。ただ一人、美由紀がいなければの話だが。

（ま……まさか……あのお兄ちゃんが……愛の告白……！！？）

美由紀は固まった状態から体の力が抜け、そのまま床へと倒れた。

「み……みゆき？」

「美由紀ちゃん！？」

美由紀は目を開けたまま気絶していた。セージに抱きかかえられても固まっているままだった。

「ちよっと美由紀には早かったかな？」

「美由紀ちゃんももう知っていい頃的年だと思うよ」

二人は美由紀の姿を見て苦笑した後、セージは美由紀の個室のベッドへと美由紀を運んでいった。

（頼んだぜ。小さなお嬢様）

第四話、決戦（1）・・・わずかな休日

美由紀はセージにベッドへ運ばれた後、そのまま次の朝まで眠り続けた。

最近の一日がやけに疲れるようになったからだ。（ゲームの中でだが）

最も、本人はその一日一日を楽しんでいるわけなのだが・・・

翌日、つまり美由紀がゲームの世界に入って三日目。

三日間着続けていたせいも、メイド服がくしゃくしゃになっていた。本人もさすがに気づき、後でレミルに代えの服をもらおうと思った。美由紀がカフェに出ると、智広が仮面を取った状態でサイドテーブルのイスに座っていた。レミルは朝食を作っていた。

「あ、おはよう、コロナちゃん」

レミルが笑顔で美由紀に言った。この笑顔は男子から見ると、すごく綺麗に感じることだろう。

「うん、おはよう」

美由紀は智広の隣のイスに座った。まだ少し眠気が取れていないせいか、目をこする。

「ふわあーあ」

カフェにセージが寝癖を持ったまま出てきた。服はクールな黒装束なのだが、寝癖で台無しである。

「あ、おはようございます」

レミルはそんなことを気にした風もなく、笑顔で挨拶する。

「はい、おはようっす」

セージは美由紀の隣のイスに座り、テーブルに突っ伏してまた眠り始めた。

「ちよっと、お兄ちゃん！」

美由紀がセージの背中をゆすって起こす。しかしセージは起きよう

としなかった。さすがに妹なので、こんなだらしない姿を見られるのは恥ずかしい。

「あはは、セージさんの寝顔ってかわいいー！」

レミルがセージの寝顔を見て言う。

「ああ、なんかもう妹として情けないです」

「別にいいんじゃない？かわいいお兄ちゃんだと思っけど」

「妹の立場になってから言ってくださいー！」

「ひゅー」

レミルがおどけた調子で美由紀をからかう。美由紀はそのテンションについていけず、小さくため息をついた。

「さ、朝ごはんといきましようか！ゼロ、彼女として彼氏を起こしてあげなさい」

レミルが嫌味ったらしく智広に言う。ゼロと言ったのも、からかっているからだろう。智広の顔が赤くなった。

「えっ、レミルさん、なんでそのことを？」

「昨日強引にゼロに聞いた」

（この人に秘密を持つてはいけないな）

と美由紀は心の中でつぶやいた。

「ほらほらー」

レミルが急かす。

「もう、やめてくださいよお」

「早く起こしてあげなさい。新婚さん！」

「なっ！」

智広の顔が真っ赤になった。さすがに可哀想かわいそうだと思い、美由紀は再びセージの背中をゆすって起こした。

「お兄ちゃん、彼女がからかわれてるよ」

「うーん・・・別にいいんじゃないかあ？」

「うらー！」

今日のカフェは、朝からにぎやかだった。

朝食後、全員が身支度を済ませると、セージから召集がかかった。ちなみにメイド服は換えてもらったのだが、換えるときにレミルから「おっ、あんたもメイドに目覚めたかあ。感心感心！」と言われたので、少しシヨックを受けた。どうせ私服を着させないくせに。

「ジャンクのことについて話すことがあるんだ」

セージ以外のカフェにいる全員が、その言葉に反応し、真顔になった。

「どうも情報によると、奴はヘイム平原にひそんでいるんだそうだ」

「ヘイム平原？」

美由紀が聞き返した。

「お客様窓口のどっかい建物があるだろ？あそこを北に行けばあるらしい」

「冒険者の始まりの地って言われてるわレミルが付け足した。」

「奴は夜に活動を始めているらしいんだ。まあここ最近だがな。情報元になったやつもジャンクに殺されたらしい。三人いたけど、一人だけかろうじて帰って来れたそうだ」

「じゃあ昼間に襲うの？今からとか」

「いや、昼間、奴は別次元に隠れているらしい。こっちからも近寄れない。反対に昼間は安全なんだがな」

「じゃあ、今夜に？」

「そこでみんなに相談なんだ。いつヘイム平原に行くか決めたい。最も、これは遠足とかじゃないんでね」

しばらく全員が黙り込んだ。どの夜にでも行こうとすれば行けるのだ。やがてレミルが口を開いた。

「じゃあさ、ブレードが帰ってきた日の夜にしようよ」

「ブレードさんがいつ帰ってくるかわかるか？」

「多分明日だと思う。昨日から三日間だけ欲しいって言ってたから」

「そうか。じゃあ今日はこの世界を楽しむとするか」

「おっ、賛成！」

美由紀がはしゃぎながら言った。

「じゃあコロナちゃん、一緒に探検しよ。もう二人組はデートだから」

レミルはそう言うと、美由紀の腰に手を回し、まるで誘拐するよう
にカフェから出て行った。

「……んじゃ、俺達はお言葉に甘えて」

「えっ、本当にするの？」

「せっかくの休日みたいなもんじゃん。デートぐらいいいだろ。それとも何か？昨日の告白は取り消しか？」

智広は照れながら首を横に振った。

「じゃあ行くこつぜ」

セージは智広の手を握って、カフェから出て行った。

第四話、決戦(2)・・・偶然と再会

レミルと美由紀はこの世界でも昼夜問わずにぎわっているということまで有名な、商店街を歩いていた。

ここでは武器屋、道具屋、服屋、電気屋、薬局などいろいろな店が至る所にあり、昼に開店するお店もあれば、夜中に開店するお店（特に酒場）もあるので、毎日のように通りは客でごった返していた。美由紀が夏に行っている夏祭りよりもにぎやかな感じがした。

「コロナちゃん、どこ行きたい？」

レミルが美由紀の手をはぐれないようにつないでいた。美由紀の身長だと簡単にはぐれてしまう。

「特に行きたいところとかは・・・」

「じゃあ私の行きたいところに行ってもいいわね？」

レミルは美由紀の返事など聞かずに、行きたい店へと歩き始めた。通りを歩いていると、変わった服を着た人たちが沢山いた。鎧に身を包む人もいれば、レミルのような魔法使いのローブを着ている人もいた。美由紀が見た中で、普通の服を着た人はいなかった。というより、この世界ではそんな服装が普通なのかも知れない。時々、セーラー服を着た女子高生達に

「見てあの子、かわいい!!」

などと言われた。考えたら、自分はメイド服だったことに気づき、ちよつと恥ずかしくなった。

レミルはいろいろな店に入っては出るといふ作業を繰り返していた。入る店はさまざまで、服屋に入ったかと思えば、電気屋に入つて適当に商品を見て回り、次に薬局に行ったりとしていた。

「何が買いたいですか？」

美由紀が通りを歩いているときにレミルに聞いた。

「特に買いたいものはないわ。ただ暇つぶしに覗のぞいているだけ」

「・・・・・・つまりネットでいうネットサーフィンですか？」

「そうそう！コロナちゃん上手い！」

「……はあ」

レミルが美由紀に親指をピンと立てて笑っているのに対し、美由紀はレミルのハイテンションについていけず、ため息をついた。

「あの……自然公園とかないですか？」

「近くにあるけど……行きたい？」

「はい。なんかここにいと息苦しくて」

「りょーかい！」

レミルは美由紀の手を引っ張りながら、商店街を抜け出し、自然公園へと向かった。

自然公園はただ草原が広大に広がっているだけの所だった。自然公園というより、原っぱと言ったほうが良いかもしれない。

商店街から少し歩いたところに草原の緩やかな斜面が広がっており、そこを下りると、後は水平に自然が広がっているだけだった。まるでここだけが都市から隔離かくりされたような場所だった。ゲームの世界だとはいえ、目の前に広がる広大な自然を見ていると、心が癒されていく。

美由紀とレミルは緩やかな斜面に腰を下ろし、水平に広がる自然を眺めていた。

「やっぱりこういいうところはいいねえ」

「ほんとですね」

草原の上ではバトミントンやキャッチボール、バーベキューやピクニックを楽しんでいる人たちがいる。どこの世界でもこの風景は変わらないのだと美由紀は思う。斜面ではカップル達が寝転んでいた。目を閉じるとすぐにでも夢の世界へいけそうだ。

「コロナちゃんはどこの国の人なの？」

レミルが寝転がりながら唐突に聞いてきた。

「えっと……それは言ってもいいんですか？」

「私だけになら構わないでしょ」

美由紀が少し躊躇ためらいつていると、レミルが、私も教えるからと付け足した。

「日本です。英語で言うところとジャパン」

「ふーん。私も日本よ。大阪に住んでるの。コロナちゃんは？」

「東京のほうです」

「そっかあ」

レミルはまるで昔を懐かしむように遠くを見ていた。

「私の幼なじみがね、私が十二歳の時に東京のほうへ引っ越してしまっただの」

「そうなんですか？」

「うん、男の子でね、可愛い妹さんもいたなあ」

「……………」

「今はどうしてるんだろう？きつとかっこよくなってるんだろうなあ。妹さんも可愛くなってるだろうし」

「…………レミルさん、失礼ですが、今何歳ですか？」

「ん？十七歳だけど」

美由紀は驚いた目でレミルを見つめた。レミルが美由紀の目に少し驚く。

「な、何？そんな目して」

「多分…………その妹さんは私だと思います」

「え！？」

「私とお兄ちゃんとは歳が五つ離れています。私が七歳のとき、つまりお兄ちゃんが十二歳のときに私達はお父さんの都合で東京へと引っ越しました。お兄ちゃんは引っ越す前によく私を連れて女の子と遊んでいました。おそらくその人がレミルさんです」

「…………でも、そんなの偶然じゃ…………」

「岩島」

レミルが美由紀の言葉にびくと反応した。

「この名前に見覚えがあるようですね。それが私とお兄ちゃんの名みよ字うじです」

「……………」

レミルは驚きのあまり、声が出せなかった。美由紀の言ったことがまだわからないのだろう。

「お久しぶりです。百合さん」

美由紀がレミルに微笑みながらレミルの本名を言った。

レミルとセージの顔を交互に見ている。やがてセージが我に返り

「……じゃあ五年ぶりってことだな」

「うん、そうだね」

しばらく会話が続き沈黙が続いた。やがてレミルが立ち上がり、背伸びをした。

「ずっと静かなのも嫌だね。カフェに戻りましょう」

「うん、ここにずっといても暇だしね」

美由紀も立ち上がってうーんと背伸びをする。

「お兄ちゃん達はどうするの？デート続ける？」

「あ、いや、ただ単に歩き回ってただけだから……帰るか。いいな？ゼロ」

「あ……うん。別にいいけど……」

「じゃあ開店しますかあ！！」

レミルが張り切ってファミリーの拠点へと走りだした。

「おいおい、マジっすか」

セージはちっとも困っていない口調でそう言った。

こうして四人は草原から姿を消した。

カフェに戻ると、レミルの勧めでセージも従業員となった。早速レミルの用意したタキシード（ブレードと同じものだ）を着たのだが、妹である美由紀から見るととても違和感があったので、必死に笑いをこらえていた。

そんな美由紀を見て、セージはこう言った。

「お前もメイド服だから俺と大して変わんないぞ」

美由紀はこの言葉にウツと息をつまらせた。

ちょうど昼食時だったので、智広が作ると立候補し、その間にセージはレミルと美由紀からウェイターの訓練を受けていた。普段はのんきそうな兄なのに、訓練を受けているときの兄は、まるで別人だった。簡単に言えば、目がキリツとしているのである。

訓練を終えるのと昼食が完成したのがほぼ同時だったので、四人は雑談を交えながらゆっくりと昼食を済ませた。雑談の内容は、セージの笑える昔話で、女三人は腹を抱えて笑い、セージ一人が恥ずかしがっていた。

昼食を終えた後、しばらくしてからカフェ、ネルストンは開店した。セージはブレードの代わりということになったので、コーヒー作りの係かかりとなった。

智広はなぜかゼロの仮面をつけて、ピアノの演奏をすることになった。クラシック系の曲は何曲か弾けるので任せると言っていた。

開店後、何人かの客が来て、徐々に客は数を増していった。そして中にはこんな客がいた。

その客は、一応店長であるレミルを呼び出してこう言った。

「今日はブレードさんのコーヒーはないのかい？私はある方のコーヒーを飲みに来たんだが・・・」

レミルは柔軟に頭を働かせ、客の質問に淡々（たんたん）とこう答えた。

「あいつはコーヒーの修行に出たんですよ。二・三日で帰ってくると思いますのでその間はセージさんのコーヒーをお楽しみください」「ほう、ブレードさんの代理かね？是非飲んでみたいものだな。よし、それを一杯頼む」

「かしこまりました」

レミルは客に一礼した後、その場を去った。

カフェは夕方頃に閉店した。セージのコーヒーはブレードには劣るが、それでもいい評判を得られた。レミルを呼び出した客も、なかなかおいしかったとカフェを去るときにセージを呼び出して話していた。セージは返事に困っていたが、とりあえず、「ありがとうございます」と一礼していた。

レミルは閉店後、早速売上計算を行っていたが、他の三人はへとへとに疲れていた。

美由紀は自分の部屋のベッドに倒れており、智広は仮面を外し、疲れた顔をしながらコーヒーを飲んでおり、セージはテーブルに突っ伏して眠っていた。

「いやあ、コロナちゃんのおかげで売上価格が三倍以上に跳ね上がってるんだよねえ。ゼロのピアノも評判良かったし」

「ありがとうございます。でも、美由紀ちゃ・・・コロナちゃんに比べたらまだまだですよ」

「すごかったもんねえ。女子高生組に囲まれてたし」

美由紀は小さなウエイトレスということで、評判になっていた。女子高生の客からはとにかく「かわいい！」と言ってもらえたのである。つまり、美由紀はカフェでのアイドルになっていたのだ。

「夜までまだ時間はありますので、私も寝かせてもらいますね。こんなに働いたの初めてなんで」

「うん、彼氏と一緒に寝ときなさい」

「・・・・・」

智広は頬を赤く染めて、何かレミルに言おうとしたが、疲れていたのも何も言わなかった。

智広は席から立ち、突っ伏しているセージを、今は空いているブレードの部屋のベッドに運ぼうとしたが、いびきをかいていたのでやめた。

智広はセージに苦笑した後に、「おやすみなさい」とレミルに言っただけで自分の部屋へと入っていった。

レミルは特別眠いわけでもなく、特にすることもなかったのでカフェの外へと出ていった。

レミルは夕日がよく見える小高い丘の上に立っていた。太陽はもう半分まで沈みきっており、残りの半分が地平線の向こうへと沈もうとしていた。

「まさか・・・・あの幼なじみと会えるなんてね」

レミルはどこか遠くを見ながらそうつぶやいた。

「今はジャンク君とかの事件があるけど・・・」
レミルは身を翻し、カフェに戻ろうと歩き出し、こう言った。
「私はこのゲームがあつて良かったと思うな」

レミルが帰ってきてても、三人はまだ眠っていた。そこで、レミルは少し早い夕飯を作ることにした。

(・・・ステーキにしちゃえー！)
レミルは少々投げやりな気持ちで、夕飯を作り始めた。

太陽が沈みきってからしばらくした後、まず智広が、次に美由紀が、そして美由紀に起こされたセージが、再び寝癖を作つて出てきた。

夕食はレミルが投げやりで作つた超豪華ステーキで、一般の人は一生に一度しか食べられないような肉で作られた物だった。

美由紀はゆっくりと味わいながら食べていたが、セージが「あくまでゲームの世界だぞ」と美由紀の満足感をぶち壊した。

夕食後、美由紀達は何日かぶりの巨人狩りへ行くことにした。全員が元の姿(智広の場合は、仮面と黒のマント。セージの場合だと黒装束の姿)に着替え、外に出ようとすると、ピアノの辺りから見知らぬ殺気が漂つた。

「おでかけかな？君達」

「ジャンク！？」

美由紀が最初に気づき、美由紀の声と同時に美由紀以外の三人が身構えた。ジャンクはフードの中から冷たい笑みを浮かべている。

「おつと・・・怖いねえ君達は。ところで、この剣に見覚えはないかい？」

ジャンクはいつの間にか右手に持っていた剣を美由紀たちに見せた。レミルはその剣を見ると、絶句した。

「それは・・・まさか、ブレードの・・・」

「ブレード君というのか。昨日剣道場を燃やしてきたんだが、この剣が出てきたんでね」

「何ですって!?!」

美由紀もようやく状況がつかめた。そう、ブレードがジャンクによつて殺されたのだ。

美由紀はとつさにポケットから黒い銃を取り出し、ジャンクに向けて打った。弾はまっすぐにジャンクの心臓めがけて飛んでいったが、ジャンクが目に見えぬ速さで回避し、気づけばジャンクはカフエの入口に立っていた。

「フフフ。 Heim 平原に来なよ、待っているよ。もし来なかった場合、世界中を一斉に排除するからね」

ジャンクはそう言つと、前のように暗闇をマントのように自分を包み、姿を消した。

「・・・そんな、ブレードが・・・やられるなんて」

「とにかく平原に行こう。ブレードさんのことは残念だが、死んでしまつてはどうしようもない」

「お兄ちゃん、そんな言い方・・・」

「残念だけど美由紀ちゃん。岩島君の言つ通りよ。とにかく今は平原に行きましょう」

美由紀は今にも泣きそうな目をしながら、セージとゼロの後ろについていった。レミルは美由紀の後ろからトボトボと歩いて着いてきていた。

第四話、決戦(4)・・・九つの龍

美由紀たちがヘイム平原に着くと、辺りは真っ暗だった。かろうじて周りが見え、美由紀がセージ達を見ても、顔の表情はわからなかった。

「やあ、いらつしやい」

平原からジャンクが姿を現した。相変わらずフードの向こうから冷たい笑みを浮かべている。

「さあこれで終わりにしよう。僕の力はもう誰にも止められない！ジャンクは両手を天におおいだ。すると天に瞬いている星達がジャンクの両手に集まっていき、やがてジャンクが光に包まれていった。そしてその光は時間をかけるごとに大きくなっていく。

美由紀が銃を取り出してジャンクに向けて打ったが、光が壁の役割を果たしているのか、弾は大きくジャンクにそれて、平原の地面ポトリと落ちた。

「・・・・・・・・ちよつとヤバイ気がするの俺だけか？」

セージが冷や汗をかきながらつぶやいた。

やがてジャンクは巨大な姿へと変化していった。その大きさはこれらの建物以上に大きい。普通に東京タワーを超えている。どこかの番組の怪獣を現物で見ているようだった。

光がジャンクから消え去ると、その姿に四人は絶句した。胴体は暗闇に消えており、そこから首が伸びていた。しかし一本ではない。九本だ。その九本の頭は龍の形をしており、九本の首、頭は全て暗黒に染まっていた。まるで黒龍が九体合体したようだった。

「・・・・・・・・おいおい、マジかよ」

「まるでヒュドラね」

「何それ？」

「神話で出てくる頭が九つある蛇のことよ。その蛇は斬られても再生すると言われているわ」

「そんな……」
ヒュドラの頭が同時に咆哮ほっしょうした。邪悪な声は平原を越えて、まるで世界中に広がっているようだった。

「どうやら人間の知性は失っているようね。まるで怪物だわ」
智広が恐ろしいものを見ているような目で言った。

「仕方がないな。解放するか」

セージは背中に背負っていた物の包帯のようなものを解いた。すると、そこに出てきたのは巨大な金色に輝く槍だった。美由紀はそのまぶしさに慣れず、思わず目を閉じてしまった。

「お兄ちゃん……なにそれ？」

セージはフツと微笑して質問に答えた。

「神の杖、カドウケウスだ。中崎……ゼロからこの世界に来る前にもらった」

セージは巨大な槍を構えた。ヒュドラはその槍の輝きに目が慣れず、目を閉じている頭もあった。

「ホーリーウエーブ……」

今まで黙っていたレミルの杖から優しい光が照射し、四人の体を光が包み込んだ。この平原に着いてから、レミルはずっと詠唱を続けていたのである。

「ブレードの分、やっちゃいなさい！セージ……」

セージはいきなり命令されたので、少し驚いていたが、ヒュドラの方へ向き直った。

「おうよ！」

セージがヒュドラの方へと走り出した。しかし、ヒュドラはセージのことなどまったく気にかけず、九つの頭が美由紀の方に襲い掛かってきた。

「……ツ！」

美由紀は銃を構えなおし、一つの頭めがけて引き金を引いた。弾は一つの頭の左目に当たった。しかし、ヒュドラは全くひるまずに美由紀に向かってきた。

すると、レミルと智広が美由紀の前に躍り出て、九つの内の二つの頭を受け止めた。智広は両手にナイフを持ち、それでヒュドラの牙を止めている。レミルは杖で牙を止めていた。しかし、二人とも受け止めてはいたものの、肩に牙が食い込んでいた。体でヒュドラを受け止めたのである。

「レミルさん！智広さん！」

美由紀が叫んだが、レミルと智広には聞こえなかった。いや、聞こえてはいたが返事をする余裕がなかったのかもしれない。

ヒュドラはいつの間にか美由紀の背後に回りこんでおり、残った七つの頭が一直線に美由紀に襲い掛かってきた。

美由紀は思わず目を閉じた。そして同時にまるで水が噴出すような音が聞こえた。痛みは感じない。自分は怪我をしたようではないらしい。では自分はどうなったのだろう……？

美由紀がゆっくりと目を開けると、そこには七つの頭を体一つで全て受け止めたセージがいた。カドウケウスで一つの頭を、右腕で三つの頭を、左腕で三つの頭を受け止めていた。噛まれた腕から、まるで蛇口をひねって出てきた水のように血がどんとどんと地面に落ちていく。そう、さっき水が噴出すような音が聞こえたのは、セージの腕が噛み付かれたからである。

「お……お兄ちゃん！！」
セージは美由紀の叫び声などまるで耳に入っていないかのようにだった。

刹那、美由紀はセージが全身の力が抜けて地面にどさりと倒れるのを見た。それが合図だったかのように、美由紀の背後から何かがどさりと倒れる音が二つ聞こえた。美由紀が振り向くと、そこには力尽きたレミルと智広がいた。

「い……いや……」

美由紀は力尽きた三人からどろどろと液体が流れ出ているのを見失ってしまった。暗くて色は、はっきりしないが、ここがもし昼だとすれば何色かはっきりとわかるだろう。

第四話、決戦（5）・・・フェニックスエリクサー

ヒュドラは一瞬何が起こったかわからず、じっとして動いていなかったが、やがて痛みを感じたのか顔を失った九つの首が暴れ始めた。切り離された九つの頭はもうピクリとも動いていない。

ブレードは前の姿と変わっていなかったが、手に持っているものは以前と違っていた。前は片手の剣だったのに、今はまるで二つの剣を繋つなげたような雑なま刀のようなものを持っていた。

「ここはちよつと危険だな。距離をとるぞ」

ブレードはそう言うと、剣を自分の鞘にしまいこんだ。すると剣は鞘に吸い込まれるように縮小してきれいに鞘に納まった。その後には智広を右肩に、レミルを右腕に、セージを左肩に、そして美由紀を左腕に抱えて高々とジャンプした。

暴れているヒュドラが見落とせるほどまでジャンプした後、美由紀はブレードに聞いた。

「ブレード、何で生きてるの？剣道場が燃やされたんじゃないの？」

「ああ、確かに燃えたよ。というより燃やされたって言ったほうが正しいな。師匠のおかげで助かったけど」

「でも・・・ブレードが前に使ってた剣が・・・」

「ああ、あれか。あれはもう必要なくなったから師匠に返したよ。代わりに今はこのダブルブレードがある」

美由紀は全てのことを理解した。つまり、ジャンクは剣道場を燃やしたのはいいものの、ブレードが生きているとは思っていなかった。きっと相当大規模な火事を起こし、ブレードは炎に飲まれたと確信していたのだらう。しかし、カフェでジャンクが言ったことは嘘だとわかった。

ブレードはヒュドラから少し離れたところに降り立ち、美由紀たちを地面に降ろした。まだ三人の体から赤い液体がぽたぽたと落ちている。

「ど……どうしよう。レミルさんたち牙にやられちゃって……」

ブレードはポケットから透明色の液体が入った小さなビンを取り出した。

「それは……？」

「幻の秘薬、フェニックスエリクサーだ。師匠の剣道場から盗んできた」

「……えっと、盗んでよかったのかな？」

「師匠が先祖代々家宝として守ってきた物らしいんだ。見つかったら現実じゃあ即刻打ち首だろうな」

ブレードはフェニックスエリクサーをレミルに飲ませようとしたが、レミルは気を失っており飲みたくても飲めない状態だった。

「まいったな。こいつ復活呪文も覚えてたはずだから、こいつにまづ生き返ってもらわないと……」

ブレードはしばらく悩んでいたが、やがてこれからすることに覚悟を決めたのか、よし！と気合を入れた。

「コロナ、今から普通にヤバイことするけど、見て見ぬ振りをしるよ」

ブレードはそう言うと、なんとフェニックスエリクサーを自分の口に入れ、口に溜め込み、そのままレミルの口へ自分の口を運んでいった。レミルの口から数滴の透明な液体が垂れていく。

美由紀は啞然としたままブレードの行動を見届けた。その後にようやく思考回路が回復した。

(く……くちづけええー……!!!)

「ちょ……ちよつとブレード、それはいくらなんでもまずいんじゃない？」

「だってこうでもしないと戦えないだろ？」

「うーん……ここは？」

さっきまで気を失っていたレミルがムクリと起き上がった。噛まれた跡もきれいになくなっている。

「さすが先祖代々守られてきた秘薬ではあるな」

レミルは目の前にいる青年をしばらく見続けた。そして、やっと目が覚めたのか、今度は目を丸くしてその青年を見た。

「ブレード！あんなんでここに！？」

「あー・・・コロナ、説明してやって」

美由紀はジャンクの言っていたことが嘘だったということと話した。そして危うくゲームオーバーになりそうだったところを、助けられたことも話した。

「レミル、とにかくこいつらを復活させてくれ。あんなやつは俺達三人じゃあどれだけががんばっても無理だ」

レミルは状況を理解し、こくりとうなずいた後に、すぐに詠唱を始めた。

美由紀は呪文が完成するのを待っていたブレードに小声で質問した。

「あの・・・レミルさんとはどういう関係なんですか？」

「関係？」

「その・・・同級生だとか、幼なじみだとか」

「ああ、そういうことか。良い言い方だったら同級生。悪い言い方だったらパシリとパシられる関係だな」

「・・・レミルさんのこと、好きなんですか？」

「な・・・なんでそんな質問になるんだよ？」

「さっきのくちづけ、普通の人ではできないと思います。何か特別な関係でもない限りは」

「なるほどな。・・・確かに好きなのかもしれないな。でもそうじゃないかも知れない。ただ、あいつは時々とんでもない事に遭遇する時があるんだ。例えば今のようにな」

ブレードは詠唱しているレミルを見つめていた。だが、その目はどこか遠くを見ている目だった。

「だからそんなときは俺が助けてやりたい。フォローしてやりたい。そんな感じかな？好きとはちょっと違うような気がするよ」

「そうですね……」

「ところでさ、俺がいない間に何があったか話してくれるか？レミルの詠唱もまだ続くと思うし」

「そうですね、わかりました」

美由紀は自分の兄であるセージが来たこと、セージがゼロに告白したこと、巨人狩りのグループ名がファミリーと決まったこと、そしてブレードのコーヒーを飲みに来た客がいたことを話した。

「ブレードさんの代理でお兄ちゃんがコーヒー係をしてくれたんです。ブレードさんには劣りますがなかなかの人気でした」

「そっか……お客さんには悪いことをしたな」

レミルを見ると、杖の先から青白い光が出ていた。もう呪文は完成するようだ。レミルは杖を天に掲げ、呪文を唱えた。

「八百万の神々よ、光と共に魂の暗闇を払いたまえ」

レミルの杖から青白い光がセージとゼロを包み込んだ。

「リバーズリザレクション！！」

光がセージとゼロから離れて消えていくと、セージが初めにゆっくりと目を覚ました。十秒後にゼロも目を覚ました。

「お兄ちゃん！智広さん！」

「んー……何が起こったんだ？」

「レミルさんが生き返らせてくれたんだよ」

「生き返った？てことは俺は死んだのか……？」

ゼロはしばらくボーっとしていたが、やがて状況がわかったらしく、立ち上がり、暴れている顔がないヒュドラを見た。

「みんな、あれを見て！」

しばらく美由紀はヒュドラを見ていなかったのですつきまでヒュドラが何をしていたのかわからなかったが、今見ると、とんでもないことが起こっているとわかった。

ヒュドラの首がどんどん胴体である暗闇に吸い込まれていく。そして暗闇の部分はまるで周りのエネルギーを吸収しているかのよう

にどんどん大きくなっていった。

「まずい、この世界をまるごと飲み込む気だわ」

「何でわかるんですか？」

「暗闇の周囲を見て。どんどん無に変わっていつているでしょ」「美由紀が見ると、星が瞬いていた空が、何もないところへと変わっていつていた。このままでは智広の言うとおり、世界が無に変わってしまう。」

「どうしよう……」

「私に考えがあるわ」

智広が全員に話し始めた。

第四話、決戦（6）・・・ゲームオーバー

「美由紀ちゃんの弾をあゝの暗闇に撃ち込むのよ。そうすれば中和反応が起こり、ウイルスは消える。お互いの拒絶反応が多少あるかもしれないけど、この平原全体ぐらいの爆発だわ。世界が消えるよりははずっとマシね。でもね、一つ問題があるの」

「問題？」

美由紀がオウム返しに聞いた。

「美由紀ちゃんの弾だけでは威力が小さすぎるの。あゝの暗闇を打ち破るぐらいの威力がないと・・・」

「だったら私に任せて」

レミルが自分の胸をドンと叩いて言う。

「みんなのありつただけの力をコロナちゃんの弾に注ぎ込むのよ。私の魔法で力を集約させることは出来る。でも・・・」

「でも？」

美由紀が智広の時と同じように聞き返す。

「力を吸い取るわけだから、吸い取られた者は意識を失う。下手をすれば死、つまりゲームオーバーよ」

「ッ！？」

美由紀は絶句していたが、他の四人はそんなことなどどうでもいような目をしていた。

「俺は力を与えるぜ。俺が死んでも、かわいい妹ならやってくれただろ」

セージが立ち上がり、美由紀を見た。

「そうね。コロナちゃんならやってくれるわ。私もあるだけの力を全部あげるわ。ブレードもそうしなさい」

「この後に及んで命令ですか・・・ま、そうするつもりだったけどな」

「私も・・・」

智広も立ち上がり、美由紀を見た。

「力を全部与えるわ。コロナちゃんなら失敗はしないと思うしね」
美由紀は四人の視線の的となっていた。美由紀は初め戸惑っていたが、戦うことを決意するために、一度目を閉じ、そして目を開けて立ち上がった。

「わかりました。皆さんの力を私に託してください」

「決まりね」

レミルは早速詠唱を始めた。

美由紀がヒュドラを見ると、そこにはもう巨大な暗闇の塊しかなかった。九つの首はすでに消えていた。

(消えてしまえ!!!)

暗闇の中からジャンクの声が聞こえた。それと同時に暗闇の中から巨大なビームが五人に向かって発射された。

「ちくしょー!!!」

セージが美由紀たちの前に立ちただけ、カドウケウスを構えた。

「ここで終わるわけにはいかないんだよ!!!」

セージはビームに突っ込んでいき、普通の人では止めることができないものをセージは止めた。

「うおおおおおー!!!」

セージがビームを止めているが、打ち負けるのも時間の問題だろう。

「うわああああー!!!」

ブレードが鞘からダブルブレードを取り出し、セージと同じようにビームに突っ込んでいった。そしてセージと同じようにダブルブレードでビームを受け止めた。ブレードのダブルブレードが、虹色のように七色に輝いている。

「変わった剣ですね。何ていう名前ですか？」

セージはブレードが手助けしてくれて話す余裕ができたのか、ブレードに質問する。

「これですか？名前は知りません。師匠の家から盗んできたものですから。でも名前をつけるならば候補があります」

「なんですか？」

「セイントブレード。七色にふさわしそうな名前でしょう？」

「フフ。いい名前じゃないですか」

「二人とも話してる場合？」

知らぬ間にセージの隣に智広がいて、ビームを二人と同じようにナイフで受け止めていた。

「くっ！これはちょっと抑えきれないわね」

「ああ。でも俺達があいつらをかばってやれば・・・」

セージは智広を見て、その後ブレードを見た。智広は仮面をつけていて表情がつかめなかったが、こくりとうなずいた。ブレードは微笑してうなずいていた。

「フフ・・・悪いな、美由紀。最後まで一緒にいることはできなかつたみたいだ」

セージは誰にも聞こえないような声でつぶやいた。

次の瞬間、ビームは美由紀とレミルの立っている場所からわずかに二センチそれて消えた。それがいなければ、確実に美由紀とレミルも飲み込まれ、死んでいただろう。しかし、三人の犠牲者が出てしまった。

「・・・・・・・・お兄ちゃん・・・・・・・・ブレード・・・・・・・・智広さん・・・・・・・・」

三人がいた場所には、金色の神の杖、カドウケウスと七色の剣のセイントブレード、そしてゼロが使っていたナイフが落ちていた。しかし、その所有者達はもうどこにもいない。その所有者達は、自分の体をビームに飲み込ませ、無理矢理ビームの軌道をずらせたのだ。「そんな・・・そんな・・・嘘だ」

美由紀の膝の力がぐくと抜け、地面にへたりこんだ。

「最後の一撃に集約せよ！！」

レミルの呪文がようやく完成したらしい。レミルは杖を天に掲げた。「エウレカ！！」

レミルの杖にカドウケウス、セイントブレード、ゼロのナイフが光の球に変化して吸収された。そして集約した光は、美由紀の手に持つている黒い銃に注ぎ込まれた。銃がオレンジ色の光に包まれ、辺りを照らした。

「いけない。あいつ、何かを打とうとしている」

レミルの言ったとおり、暗闇の塊はさらに世界を吸収し、エネルギーと化している。そしてレミルが見た状況だと、いかにもこっちに何かを打ってきそうな様子だった。さっきのビームよりもさらに強烈なものだろう。

レミルの体が自分の杖に吸収されていた。エウレカの効果は、術者に対しても効果がある。したがって、レミルも姿を消し、美由紀の銃の力となるのだ。

「そ………んな………みんなが………」

「コロナちゃん、しっかりして！みんなの犠牲を無駄にするつもり！？」

美由紀はハツとした。そうだ、せつかく自分達の命を削って助けてくれたのだ。自分はそれに報いる何かをしなければいけない。その報いることが何なのか美由紀にはわかっていた。

美由紀は立ち上がり、先にある暗闇の塊を見た。世界がどんどん無に変わっていつている。もう大きさは計り知れない。町を二つ分ぐらいまるごと飲み込んだような大きさだ。

美由紀はゆっくりと力を与えられた銃をまっすぐに暗闇に向けた。（そう、それでいい。後は打つだけ。あなたの銃でジャンクの邪悪な心を追い払ってあげて）

レミルの声が聞こえた。美由紀がレミルのいたところに振り向くとそこにはもう何もなかった。変わりに、小さな光の球が、銃の中へ入っていった。

もう暗闇は何かを打とうとしている。美由紀は銃に神経を集中し、銃口を暗闇のど真ん中に向けた。

（大丈夫だぜ）

ありがとう

エピソード

美由紀は目を覚ました。周囲を見渡すと、そこが自分の家だとわかった。時計を見ると、母が歯医者に行ってから三十分しか経っていない。

パソコンのモニターは休止状態になっており、美由紀がディスクを取り出すと、そこには何もなかった。

(あれは……どうなったのだろう……?)

美由紀は複雑な気分だった。三日間はゲームで過ごしたのに、現実では本当に三十分しか経っていない。それに、自分が打った弾は本当にジャンクを……正広を本当に救ったのかもわからない。美由紀はパソコンの電源を切り、そのまま呆然としていた。

その時、電話がかかってきた。五回ほどコールが続いて、ようやく美由紀は我に返り、電話の受話器を取った。そこから聞こえた声は同じゲームをしていた智広だった。

「あ、美由紀ちゃん！正広は大丈夫よ。あなたが世界を救ったのよ」
美由紀は特に嬉しさも感じなかった。ただ現実と仮想現実の区別がつかず、混乱していたのだ。

「今からそっちに行くわ。正広も連れて行く」
智広は美由紀の返事も聞かずに電話を切った。美由紀も受話器を元に戻し、リビングのソファーに横になった。

3日後、美由紀と母は兄が合宿から帰ってくるので、兄の学校の校門前に立っていた。

「あんたがお兄ちゃんのお出迎えするなんて珍しいわねえ」

母の言葉に美由紀は微笑して

「三十分の事件があったからね」

と答えた。母は怪訝けげんそうな顔をしていたが、バスが見えたので、そ

うちのほうに気をそらした。

校長の長い話から解放され、校門前に兄が荷物を背負って出てきた。

「お兄ちゃあーん!!!」

美由紀が疲れている兄の懐に飛び込んだ。兄は重さに耐え切れず、尻餅をついた。帰ろうとしている兄の同級生から「おーおーラブラブだねえ」などとからかわれていた。

「珍しいわねえ、あんたがお兄ちゃんに抱きつくなんて」

母の言葉に美由紀は微笑して

「三十分の事件があつたからね」

と答えた。兄は美由紀の頭を撫でてやり

「よくやった。ありがとな」

と美由紀を褒めた。

「珍しいわねえ。あんたが美由紀を褒めるなんて」

美由紀の小学校の卒業式の数日前、美由紀たちは兄の部屋であるゲームのことに話していた。兄の誘いで、関西の方に住んでいる百合とブレードも来ていた。百合もブレードも私服だったが、顔はゲームの時と変わっていなかった。キャラ設定で顔などを変えなかったのだろう。

正広も来ていた。顔は少しやつれていて、細身の体型をしている。いかにも前まで引きこもっていたような姿である。

「あのね、この話を私の学校の同級生に話してみたいんだけど、いいかな?」

百合が話の隙間を見て全員に聞いた。

「いいと思うけど、まず信じてもらえないと思うぞ」

「大丈夫。ちょっと変わった奴だから」

「どんな奴だよ?」

「ファンタジーバーカな男。小説書くの趣味にしてるんだって」
「てことは……ちよつと待て、この話を小説化にさせる気か？」

「うん、そう。まずあいつだったら信じなくても書くと思うし」
「そつか……いつそのことなら最後まで書いてほしいな。中途半端じゃなくてさ。文章表現なんてどうでもいいから」

「あいつなら何年かけようと書くと思うわ」
美由紀たちが卒業した春休み、美由紀たちはその男の家に向かうことになった。

美由紀の小学校の卒業式。美由紀は卒業証書を受け取るために、担任の先生から呼ばれる。卒業式前に何度か練習があったのだが、百人中五人ぐらいしか聞こえないぐらいの返事しか出来なかった。しかし、今の美由紀は違う。あのゲームがあつてから、いろいろなことを学んだし、自分から動かなければ何かは得られないと言う事も学んだ。そしていろいろな偶然と再会。

今の美由紀は前の美由紀とは違い、自分から進んで行動を起こすようになった。これからもそうだろう。

美由紀の番がやってきた。美由紀は腹に大きく息を吸い込んだ。美由紀は遠くを見た。美由紀の兄と智広が見えた。智広は微笑んでおり、兄はウインクしていた。

担任の声がスピーカーから流れた。

「岩島 美由紀」

美由紀は百人中百人がはつきりと聞き取れるような声を出した。

「はい！」

後書き&解説

構想して約五ヶ月。ようやくこの小説を書ききることができました。

読んだ方は誰もが疑問を抱いている「こんぺい島」という名前。題名に書かれています。どこと関係あるんだ？と知っていることでしょう。

実はこれ、初めに出てきたゲームの書き込みがあった掲示板のサイトの名前なのです。なぜこれが題名になったかというところ、現在の作者の妹がサイトを作成中なのです。そのサイトの名前が「こんぺい島」つまり、この作品は、まだ作成途中のサイトを宣伝するために作られた小説なのです。

しかし、現在、小説が完結してしまい、妹のサイトはまだホームページビルダーの中で眠っているのです。しかも妹本人は、サイトのことなど記憶の果てに消えていってしまっています。そんなわけですので、題名に気を捕らわれずに読んでいただければいいかと思えます。

さて、ここら辺でご挨拶を

最後まで読んでくださった読者の方々。こんな駄文を最後まで読んでくださったありがとうございます！読んでくださる方がいるからこそ、作者は書き続けるのです。皆様には感謝しまくりです。これから高校生活に作者は入りますので、いろいろと忙しく、他の作品が掲載されるのは難しいと思います。しかし、作者は時間を見つけては書くつもりですので、掲載したときは「おっ、こいつ、やりやがった」などとコメントしてください（笑）

短い後書きでしたが、本当に読者の皆様、ありがとうございます

た。できれば小説の感想などを書いていただければ幸いです。それではまたどこかで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973b/>

こんぺい島（三十分間の体験ゲーム）

2010年10月10日05時40分発行